

# 統

# 一

法財人團  
統  
一團發行

## 次 目

佛教の根本と其の應用(其七)……………	本多
開目鈔講話(第二十五講)……………	小林
偶感……………	金子
成佛と淨土論……………	中村
日蓮聖人の主張……………	梶木
記事……………	顯正
○本部團報	
○福島支部報	
○酒悅立正青年團報	
○福島高商同窓會	
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其十四)……………	本多
	日生

號月二十年三十四第

14.1.4



財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其得頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 翠語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

- 第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事
- 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事
- 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事
- 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事
- 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
- 教旨ノ正明 研學ノ週達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ
- 寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持続セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク得頭布教並ニ教化講商會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正副員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正副員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用

(其七)

本多日生

釋尊中心

増一阿含であります、阿須倫品と云ふのがあります、其處に

爾の時に世尊諸の比丘に告げたまはく、若し一人有つて世に出現すれば多く人を饒益す、衆生を安隱し世の群萌を慈み、天人をしてその福祐を獲せしめんと欲す、云何が一人と爲す、所謂多薩阿竭、阿羅訶、三耶三佛これなり。

これはどう云ふ事かと云ふと、お釋迦様の仰しやるには、一人世の中に出て來ると大勢の者が救はれるその救と云ふのは生きとし生ける者を、この世の中から幸福に導いて助けてやるのである。その一人と云ふのは佛様だ、三耶三佛と云ふのはお釋迦様自身のことを仰しやるのである、その意味が詳しく説かれて居るのであります、ズツと一人あつてと云ふことになつて居る。



若し一人有つて世に出現すれば、便ち智慧の光明有つて世に出現せん、云何が一人と爲す、所謂多薩阿竭、阿羅訶、三耶三佛これなり、諸の比丘よ、當に信心すべし、佛に向ふて傾邪有ること無かれ。

この所にもズツと續いてその事が詳しく説かれてある。

若し一人有つて世に没盡すれば、人民の類多く愁憂を懐かん。

若し一人有つて世に出現すれば、爾の時に天及び人民便ち光澤を蒙らん。

續いて一人世に出現すれば、多くの者は救はれると云ふことを説くのである、茲にもう二人だの、三人だの、さう云ふ事では佛ではない。佛と云ふものは圓滿の悟を開いて、圓滿の働を持つ者であるから、佛が二人連れ出て來るの、女中を連れて出て來るのと云ふことはない、これはもう佛法の原則である、だからして一人世に出現すればと云ふ、それが法華經へ來ては「唯我一人能く救護を爲す」と云ふことになり、或は屬して一人と云ひ、一人に屬すと云うて、譬諭品に「この三界は一人に屬す即ち常道なり」とあり、天皇に屬すと云ふのは天皇に二人あるべからずと云ふことと同じ「天に二日無く國に二王無し」と云ふやうなことが涅槃經の中に佛が説いて居る。それだから日本の國體などを説明する言葉になつた、佛法が本家である「一佛化境に二つの尊號なし」一つの佛を敬仰する世界に、二つの尊い名前が現はれて何方にしませうと云ふやうなことはないものぢやと云ふのが佛法の定則である。これを

徹底して來るのが法華經であります、原則は今言ふ通り阿含の阿須倫品に詳しく説かれてある。さうして弟子あたりが教化に巡はられると云ふと、皆その人を尊敬するやうな氣分になる時に、それを皆斷つて居ります。これはもう實に澤山その事があるのであります。阿含全體に亘つて大勢の弟子が斯う云ふ問題に打ツ突からぬことは殆どない位でありまして、迦葉が或人を教化した時分に、その者があゝ有難い、あなたの教を受けたと云うて掌を合はさうとすると、迦葉が言ふて居ります「汝我に歸すること勿れ、我れ歸し奉る所の無上尊の如き汝當に歸依すべし」この迦葉が歸依して居るお釋迦様をお前は歸依しなければならぬと申して居るのである。中阿含の中には舍利弗尊者に對して陀然梵士と云ふ者が舍利弗に歸依しやうとした時に舍利弗が言うて居ります「陀然よ、汝我に歸すること莫れ、我が歸し奉る所は佛なり、汝應に自ら歸し奉るべし」おれは佛様に歸依して居る、お前も歸依しなければならぬ、斯う言ふて居る。又阿難尊者にも同じ事があります、郁伽梵士に阿難が告げて曰く「郁伽よ、汝自ら我に歸すること勿れ、我自ら佛に歸し奉るが如く汝も當に自ら歸し奉るべし」尊者には同じやうな事が皆あります。これは皆佛法の通則で、丁度日本の軍人がどう云ふ手柄を立ててもその勳功と云ふものは皇室の稜威の然らしむる所とその功を皇室に歸して、ア、有難いと感謝しやうと思へば皇室に感謝せよと云ふ如くになつて居るのが佛法である。東郷大將が對馬海戰の大勝利を博せられた時の報告の一番初めにも、天佑に依りこの戦さは勝つた、陛下の稜威の然らしむる所と云ふことを申して居るの



であります。さう云ふ工合に佛弟子達も申して居ります。教化して有難いと感じたならば直ぐこの話をするのも皆釋迦如來の御教であるからと云うてお釋迦様に基くのが佛法の教である。佛教信者は何處へ行つて宜しいかと云うてマゴ／＼せねばならぬ色々宗旨があるものですからと云ふやうなことは、これは餘計な話である、この事は動きの取れぬ事である。併し他のお經に依るとそれがウロ／＼するから、法華經を中心にして阿含を味方にして、それから一切經を讀みさへすれば宜い、併し釋迦中心の思想は華嚴全部、阿含全部、發菩提心論の七八分、法華全部、涅槃全部、皆釋迦中心である。唯發菩提心論の一部とか、阿彌陀經とか、大日經とか、一切經を通じて釋迦中心と云ふことは無理な事である。日蓮聖人あたりが法華經に依れと云ふことを仰しやるのも、唯お經を尊ぶ譯ではないのである、これは法華經に依ればお釋迦様中心と云ふことがよく分る、阿含に依れと云ふこともお釋迦様大事と云ふことがよく分る、他の中途半端のお經に依ると云ふと、お釋迦様を大切に思はぬやうな事が出て來るのである。

それであるからしてこれは日蓮聖人の善無畏三藏鈔と云ふ御書であります、御遺文で六百四十四頁の所に斯う云ふことを日蓮聖人は言うて居られる「優填大王の赤桁檀、いまだ佗佛をばきごませ給はず」初めて佛像を刻んだ優填大王が刻んだ佛像と云ふのは外の佛ではない、お釋迦様だ「千塔王の佛像も釋迦如來なり、而るを諸大乘經による人々」これは今言ふた論師である、難疑なお經による人があ

我所依の經々を諸經に勝れたりと思ふ故に、教主釋尊をば次さまにし給ふ、一切の眞言師は大日經は諸經に勝れたりと思ふ故に、此經に證とする大日如來を我等が有縁の佛と思ひ、念佛者等は觀經等を信ずる故に阿彌陀佛を娑婆有縁の佛と思ひ。

斯う云ふ譯でも經に依ると云ふことは丁度三部經に依れば阿彌陀如來が有難いやうに思ひ、大日經に依れば大日如來が有難いやうに思ふからして、一切法華經を中心にし阿含を味方にして一切經を味つて行けばさう云ふ事はない、理想としては法華經は完全にして、事實としては阿含が根本である。法華經は事實に遠く、阿含は理想が足らぬ、帯にや短かし袴にや長しと云ふもので半端なものである。法華經と阿含を一緒にして十分研究せらるればそれで完全なものが分つて來る、その事は先づ違はない。これからの佛敎を研究する者はよく注意して行かなければならぬ。それで法華經に依ると云ふことも今の法華宗のやうなお經ばかり有難くても内容はそれでは駄目だ、法華經と云ふのは鬼子母神や帝釋様、そんなことを言うてはならぬ、法華經と云ふのは今の釋迦中心の思想を確立し、人々の心に就ても敎を確立して佛敎の根本義を一層明瞭に徹底せしめた所に法華經があるので、法華經の細かいことは阿含を以て研究しなければならぬのである、そこに行けばそんな鬼子母神や帝釋など、云ふものを妄りに粗末にせよとは云はぬ、佛敎の人は他宗のものに相當敬意を拂ふことになつて居ります、崇敬すべきものではあるが、守つて呉れと云うて祈るものではない。



そこで信心をするにはどうしても先づお釋迦様を中心にして行くと云ふ事になる、それから今度は善心と云ふのが其處から現はれて来るので、信心があれば必ず道德の精神が現はれて来る。この信心が直に五戒と云ふものを産んで来る、阿含に依れば三歸五戒と云うて、佛に歸依し佛の教を護り、佛の教の仲間入りをして大勢の人達と一緒に正義を行って行く團結に加はる、これを三寶に歸依すると申すのである。佛に歸依すると云ふのはお釋迦様、法に歸依すると云ふのはお釋迦様の教に従ふことである、唯無暗矢鱈にお經を讀んで居ると云ふ事ではない、お經は教である。今はあゝしてジャブ／＼讀んで居けれども、佛の説かれた時分には分るやうに話された、分つたから駄目を押されて、分りましたと申上げたと云ふことを書いてあるのがお經である。それを唯分らずにジャブ／＼と云ふのはお經になりはしない、お經と云ふものはお釋迦様が説教を斯う云ふ風に話をして「分つたか」「分りましたか」「さうか忘れぬやうにせよ」と云ふことが書いてある、それを些とも内容に入らずして棒讀みにしてジャブ／＼カンカンとやつて居る。お經と云ふことは、法に歸依すると云ふことは、教を了解してそれを護ると云ふことが主なるものである、佛法の教に従つたる心得を持つて行くと云ふことが、それが法に歸依する。佛に歸依すると云ふのは、佛を師匠に仰いで佛を大切に、足らざる所は佛に補つて貰ふと云ふ事である、け

れどもいきなり譯も分らずに頼み込んで、言ふことを聽かなければ承知せぬ、火を放けて焼いてしまふそんな酔つ拂ひのやるやうな事をしたつてうまく行くものではない、相當の諒解を以て佛の教に近付いて行くのである。佛像を壊したつて佛は壊れるものではない、ドゾウウたつてドヅケルものではない、さう云ふ脅迫に依つて佛が護つて呉れるものではない。怒鳴り込んでも向ふは平氣である、暴力を以て言ふことを聽かなければ火を放けてやると言つて火を放けたつて、木像は焼けるけれども佛は痛くも痒くもない、よく木像を油で煮て言ふことを聽かしたと云ふ話があるけれども、それは嘘ッばちである、神様や佛様の木像を油で煮たつて痛くも痒くもありはしない、蠅が止まつた程も感じはしない。それを言ふことを聽かないから佛像を油で煮たら到頭弱つて言ふことを聞いたと云つて威張つて居る、そんな事はありはしない。お釋迦様を信心する以上は素直な精神を以て、お釋迦様の精神に適ふやうに精神を向けて行くと云ふ事が大切な事である、法を信ずると云ふ事はさう云ふ風な事である。

僧と云ふのはこれは今は坊さんと思ふけれども、さうではない。坊さんと云ふのはその中の頭を長老と云ふけれども、僧と云ふのは團體を云ふのである、僧衆と云うて、仲間を言ふ事である、會員になるやうな意味のことを考へたら宜い、佛教徒の中に加はつてさうして共に善を行つて行く、即ち世の中に悪い者が中々多いからして、佛を中心に佛の教を奉ずる者が團結して世の間違を矯正して行くと云ふ事になるのである。今のやうに宗派などを設けて居るけれども佛教徒としての團結が餘りに弱くて、



世の墮落なり罪惡なりで世の壞れて行くのを防ぐ力がないやうな事では、それは僧に歸依すると云ふ事になつて居ない、それは僧を破つて居るのである。これはもう長い間の坊さんの悪い癖だ、改革されなければならぬ。その改革は坊さんの手でするかどうか分らぬが、本當の佛教が復活する時分には先づ亞細亞民族の大聯合か何かの中に本當の佛教が起るだらう、民族の將來を改革する場合に西洋の思想ではどうしてもいかぬ。段々ものを研究して見ると、思想と云ふものは何でもないやうだけれども皆それが根柢になる、今日の支那の問題でも支那は今ガヤ／＼やつて居るけれども、要するに南方北方と云ふのは何かと云ふならば、どうしてもこれは思想の問題である。北の方は國家思想が根柢であり東洋思想を支持しやうとして居る、南方は西洋思想と云ふか赤化的の觀念が餘程強くなつて、其處に保守と輕佻激進な思想との間の衝突になつて居る、色々の關係があるけれども兎に角思想が根柢になつて、さうして南軍北軍と云ふやうな事で喧嘩するのであります、これは恐いものである、西洋のゴタ／＼するのも皆思想が根柢である。政治の戦でも武器の戦でも色々な事が思想が根柢で一切兇暴なる戦をやる人殺しても大抵はさう云ふ事になる、可愛い女が向ふを向いたとか何とか云ふことで女を殺す、思想なのである。一寸こちらを向いて笑つてさへ呉れれば宜いのに、一寸向ふを向いたが爲めに殺す、思想が中々大切なものである。大きな問題でも矢張り思想なんだ、人間の考が曲らないで正しく善くなつて行けば、もう日々新聞に現はれて居るやうな世間の出来事も大いに緩和されるし、大きな團體的衝突も

緩和されるし、世界の荒浪もこれが平定するやうになつて行くので、それが即ち人間の心及び思想と云ふものが正道に基かなければならぬのであると思ふ。そこで釋迦様が大聲で我を信じ、我教を信じ、我正義の團結に加はつて協力せよと云ふことを言はれるのであつて、僧に歸依すると云ふことは水乳和合と云ふて水と牛乳と合はせるやうなものである、少々外の事で違ひはあらうけれども、釋迦様を中心にお釋迦様の教に集つた以上、浮華輕佻を抛ち、丁度瓶の中に一合づゝ水と牛乳を入れて振つたやうな工合になる、一合づゝ水と牛乳をコップの中に入れて入れた時には、水と牛乳は質は違ふけれども、瓶の中を振つたならば到底水と牛乳を合つことは出来ぬやうになる、我水に集る者は水乳和合せよと釋迦様は言はれたのである、それが僧に歸依せよと云ふ事である、今は僧には歸依しない、水と牛乳どころではない、水と油のやうなことになる。併し正義は主張しなければならぬから吾々相當攻撃はするやうだけれども、吾々は正義の主張を明かにして乳の腐らぬやうに團結を主張する、向ふもさうだと云ふかも知らぬけれども、どうも私共から見るとさうでないやうである、眞實の教を重んずる精神から考へたならば、私共は始終話をするには、佛法の原則に依つてお話を居るのである、少しも因はれてお話する所は無いやうに思ふのである。



# 開目鈔講話

(第二十五講)

小林一郎

この間讀んで居りました所は、要するに縁といふものが非常に大事である、吾々はこの娑婆世界に特に縁の深い釈迦様が御出現になつて、教をお説きになつたといふ、その尊い縁を空しくしないやうにしなければならぬといふ意味で、縁といふことを説かれたのであります。しかしながら釈迦様が世の中に出て、五十年の間教をお説きになつた中に於ても、靈鷲山で法華經をお説きになる迄は方便の教で、だん／＼聽く人の心持を馴らして來られて、結局法華經に於て、お釈迦様が御自分の信じて居らつしやる限りをスツカリ打明けて説かれたといふこ

とでありますから、若し法華經が説かれなければ、折角の縁が何にもならない、その縁が意義を失ふのであります。佛の方では初めから眞實のお心持をその儘打明けて説くことが一番いゝ事なのだけれども、奈何せん、聽く人の機根がまだそこ迄行つて居ないから、四十餘年の間方便の教ばかり説かれた譯です。その方便の教を説かれたのは、此の間も申したやうに、梯子段を登つて行つて二階へ行くやうなものだから、二階へ上つて見れば、梯子段を登つたことは無駄ではないのであつて、皆一段々々がそれぞれ價值がある。二階に登らなければ、梯子の途中

で止つたのでは何しに登つたか判らぬといふことになりません。そこで法華經を説かれたことが、今迄の説教を皆意義あるものにするといふことになるのでこれは非常に尊い事です。それを是から説いて居られます。

例せば諸の聲聞が初地初住にはのぼれども、爾前にして自調自度なりしかば、未來の八相をごするなるべし。

聲聞といふのは屢々申したやうに、小乗の教を學んで世の中に執はれず、世間の名譽とか、損得に執はれない心持を持つ者であります。それがだんだん進んで行けば初地、初住にまではなれる。「地」といふのは信仰がスツカリ自分のものになつたところ、地面といふものは動かぬものであります。それと同じやうに自分の信仰が動かなくなつて、所謂自得した状態になれる。「住」といふのは「地」より稍

稍進んだもので、信仰が續くやうな状態「住」は續くといふ意味であります。さういふやうな状態には相當の修行をすればなれるけれども「爾前」即ち法華以前の教でありますと、大體に於て自調自度である。「自」といふのは自分の心のこと、「調」といふのは亂れたものをととのへるといふ意味です。人間の心は煩惱があるものですから、煩惱の爲に始終亂れて居る、その心をととのへて亂れないやうにするのが自調。それから「度」といふのはわたるといふ意味で、迷の中をわたつて、世間のいろ／＼な出来事や何かに依つて自分の心が動揺することのないやうになつた状態。その位のことには法華經でなくても他の説法でも出来て居たのです。けれどもそれだけであつて、まだ世の中の一切の苦しみ惱める者に對して同情を有つて、彼等を救ふとか、導くとかいふやうな心持は出来なかつたから、それで法華經以前の經を聞いただけでは「未來の八相を期する」この世



ではとても佛に成れない、後の世になつたら或は八相を具へて、お釋迦様と同じやうになれるかも知れないといふ位であつて、甚だ心細い状態であつた。

ところが法華經をお説きになつて、現在世の中の煩を受けないやうな者でも、モット進んで行けば世を救ふ者にもなれる人を救ふ者にもなれるといふことを打明けられましたから、そこで初めて舍利弗、阿難、迦葉といふやうな者はそれで自分達も奮發してこれから所謂菩薩の行を勵みませう、世の爲人の爲に力を盡ませう、といふ決心をした譯でありま

す。それで法華經以前と法華經を説かれた後とは、大分その間に根本的の違ひがある譯であります。  
しかれば教主釋尊始成ならば、今此世界の梵、帝、日月、四天等は劫初より此土を領すれども、四十餘年の佛弟子なり。  
靈山八年の法華結縁の衆、今まありの主

様のお弟子になつたのは四十餘年、お釋迦様がお覺りになつてから以來四十餘年の間、初めて教を承つたので、その教を承らない前から、梵天、帝釋といふ者はこの世の中に縁がある。だからどつちが大事故と言へば、お釋迦様よりは寧ろさういふ天上界の神様の方が大事だといふことになるかも知れない。靈鷲山に於て八年間法華經を聞いた人でも「今まわりの主君」といふのは、此の頃自分の上に立つたものだ、お釋迦様は僅か四十餘年であるから、此の頃の御主人である。梵天、帝釋は何千年も前からこの世を治めて居るといふのだから、さうして見れば梵天、帝釋の方が古い縁があるので、お釋迦様は此の頃縁を結んだ方である、だから「おもひつかず」そんなに有難いとは思はない「久住の者」といふのは今の梵天、帝釋といふやうな者のことでありま

君におもひつかず、久住の者にへだてらるゝがごとし。

若し教主釋尊が始成ならば「始成」といふのは、この世で修行して始めて覺を得るといふことであります。さういふやうな佛であるならば、今この世界の梵天とか、帝釋とか、日月、四天といふ者の方が、お釋迦様よりは却てこの世に縁が深い譯である。何故なら梵天、帝釋といふやうな者は、遠い昔からこの世の中を治めて居ると斯う言ふ。お釋迦様がお覺りになる前から、梵天も帝釋もこの世に縁があつて、この世を護つて居るといふ譯である。さうするとお釋迦様の方が寧ろ後輩になつてしまつて、梵天とか帝釋とかいふ天上界の神様の方が、却てこの世の人の歸依を得るといふことになるでせう。劫初よりこの土を領す」といふのでありますから、世界の初めからこの世の中に縁がある。それがお釋迦

るゝといふのは、その方が幅を利かすといふやうな意味です。梵天、帝釋の方が却て皆に重んぜられるやうなことであるのかも知れない。

今久遠實成あらはれぬれば、東方の藥師如來の日光、月光、西方阿彌陀如來の觀音、勢至、乃至、十方世界の諸佛の御弟子、大日、金剛頂等の兩部の大日如來の御弟子の諸大菩薩、猶教主釋尊の御弟子なり、諸佛釋迦如來の分身たる上は、諸佛の所化申におよばず。何に況んや此土の劫初よりこのかたの日月衆星等、教主釋尊の御弟子にあらずや。

ところが法華經の壽量品に至つて久遠實成といふことが現れて、お釋迦様がナニもこの頃の佛様ではない、抑々遠い昔から、一つの佛様即ち「本佛」といふものがあつて、その佛様が幾たびとなくこの世



に現れて教をお説き下さつた、さうして又今度印度の國王の子としてお生れになつて、修行を積んで、覺りを開いて、吾々に教をお説きになつた、これが釋迦牟尼佛である、お釋迦様と吾々の縁はこの世だけの縁ではないといふことが判つたから、さうなつて見ると、その本佛といふ根本の一つの佛様が總ての物の始めだとすれば、一切の佛様は皆その佛の現れたものだといふことが初めて判つた。東方の世界を教へて居らつしやる藥師如來といふ佛様の下に居つてお仕へして居る菩薩に、日光、月光といふ菩薩があるといふことである。又西方の阿彌陀如來の下には觀音菩薩・勢至菩薩といふ菩薩があつて、阿彌陀様の教を弘めることに力を盡すといふこともある。又十方の世界のいろ／＼な佛様の所に、それぞれ弟子があるが、それらも皆、お釋迦様といふ方が昔からの本佛だといふことになれば、そのお釋迦様の弟子でない者はなくなる譯である。又眞言

れる譯です。その本佛が、特に娑婆世界に住んで居る私共を教ふ爲にも釋迦様となつて現れた、斯ういふ關係になつて居る。さうすると他の佛様の弟子でも、結局その佛は根本の本佛が現れたのである、その本佛が今も釋迦様となつて現はれて居らつしやるのだから、この外に出ることは出来ない、斯ういふ關係になるのです。だからナニも他の佛様が詰らない佛だといふ譯ではない。それは本佛といふ唯一の尊い佛様があつて、それがいろ／＼な斯ういふ佛となつて現はれたのであるから、それは皆尊いに相違ない。けれども吾々は今此の娑婆世界に住んで居る、その娑婆世界に住んで居る吾々を惑んで、特に本佛がお釋迦様となつて現はれて下さつたといふのであるから、吾々としては釋迦如來を通じて本佛を仰ぐといふより外はない譯です。決して他の佛様を輕んずる譯ではないが、現にその事を前にも言つて居る。縁がなければしやうがないではないか。

宗の方では大日經とか、金剛頂經といふやうな佛があつて、その經を讀むと、大日如來といふ佛がズツと昔からの佛様であつて、その大日如來の教より以上のものはない。又その大日如來の教に歸依した者がいろ／＼徳を具へて菩薩になつたといふのだけれども、さういふ者でも皆教主釋尊のお弟子になつてしまふ。何しろ本佛だから、根本の佛様ナンだから、その一番初めからある佛様が現れたのが他の佛様である。阿彌陀如來であらうが、大日如來であらうが、何であらうが、皆その一つの本佛の現れたものである。さうするとその現れた佛のお弟子といふのは、やはり初めの佛様のお弟子と考へるより外ない譯である。

根本の一つの本佛、つまり壽量品にある如來秘密神通之力と言はれたその如來がいろ／＼な佛様となつて現れる。それが例へば大日如來となり、藥師如來となり、阿彌陀如來となり、多寶如來となつて現

この娑婆世界に縁があつて、本佛が釋迦牟尼佛となつて現はれて居らつしやる、斯ういふのだから、吾は釋迦牟尼佛の弟子であることは、即ち本佛のお弟子である、此の事に満足を感じ、此の事に喜びを感じるといふ外はない。又他の世界にどんな菩薩があつても、やはりこれは結局本佛の現はれた佛様のお弟子だから、それは本佛のお弟子である。その本佛はお釋迦様になつて現はれて居らつしやるから、お釋迦様の弟子と言つたところで差支ない譯である。

さういふ風に考へれば、私共の信仰といふものが絶対のものになつて来る。この前にも申し上げたと思ふけれども、吾々が信仰をすれば絶対の信仰でなければならぬ。今自分は斯ういふ教を信じ居るけれども、今にモット良いのが出て来るだらうか……」といふやうな考へでは、自分の信仰に魂を打込むことは出来ない譯でありますから、そ



の關係を明かにすることが大事です。この事は随分繰返し／＼説いて居られますけれども、一番大事な問題である。土臺がグラ／＼して居たのでは、世の爲とか、人の爲とか言つたところが、それはまるで根柢を失ふことです。その事を茲にハッキリ決められた。いろ／＼なお弟子も皆教主釋尊のお弟子である。教主釋尊のお弟子であるといふことは、所謂本佛の現はれた佛様のお弟子でありますから、どれも違ひはない。何も西の方の極樂淨土を羨むにも及ばなければ、東の方の樂師如來の國土を羨むにも及ばないのであつて、吾々がこの娑婆世界に於てお釋迦様の教を信じて居れば、それで有ゆる世界の有ゆる佛、有ゆる菩薩のお心持と一致するのであつて、そこを少しも疑ふには及ばないのである。「諸佛如來の分身たる上は」有ゆる佛様が、本佛の身を分つて現はれて居る佛様であるとすれば、「諸佛の所化」そのいろ／＼な佛が教へ諭してお弟子になつた人々は言

ふに及ばず、皆一つの本佛のお弟子と考へなければならぬ。何に況んや「此土」この娑婆世界の出来た初めから、こゝに居る日天、月天とかいろ／＼な星とか、或は梵天、帝釋とかいふものは、無論お釋迦様のお弟子でなければならぬ。

だから斯ういふ風に考へれば、一切の佛教といふものは法華經に依つて統一さるべきものと思はなければならぬ。これはこの前申した「絶待妙」といふ意味をよく説き現はされて居るのであります。ただ法華經が他の經に比べて尊いといふだけでない、法華經と他の經と比べて、この方が上だといふだけであれば、それは前に申したやうに相待妙であるけれども、法華經といふものが出て、初めて總ての佛様の關係が判つた、總ての佛に歸依する人が結局一つのものに纏まるといふことが判つた點に於て、所謂絶待である、モウ是より外動かないといふことを言はれて居るのであります。だから日蓮上人が、自

分は新しく一つの宗を開く積りではないと言はれるのは尤もな譯なのです。何故なら、法華經といふもので總てのお經が皆纏まるのである。法華經の中に現はされて居る本佛といふものが、阿彌陀様でもあれば、多寶如來でもあれば、大日如來でもあれば、有ゆる佛なのであるから、この法華經の信仰といふものは、なにも他の宗旨の中に新しく宗旨を立てようといふのではない、一切の宗旨の根本を明かにしようといふことなのです。ですから今のやうな状態であるのは、實はをかしい事なのです。日蓮宗とか法華宗とかいつて、眞宗とか淨土宗といふものと對立して力を争つて居るといふことは、法華經の立場から言へばをかしいことです。そんな宗と宗と對立すべきものではない、それを纏める根本のものを一つ説かう、斯ういふことです。だから日蓮上人は、

自分ほどの宗の祖師でもなければ末葉でもない、別に新しい宗の祖師になる譯でもない、又どの宗にか

屬して居るその弟子でもない、お釋迦様の御精神をその儘に茲に弘めるのだ、斯ういふことを言つて居られるのであります。法華經といふものの本當の性質を考へて見ますと、どうしてもそこに迄考へなければならぬ譯なのであります。

而を天台宗より外の諸宗は本尊にまどへり。俱舍、成實、律宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり。天尊の太子が迷惑して我身は民の子とおもふがごとし。

天台宗では、天台大師が支那に御出現になつて、今申したやうな趣意を説き明されたから宜しいけれども、天台宗以外の宗はその所が判らないものだから、何を自分の本尊として守つていゝか判らない。例へて言へば俱舍、成實、律といふやうな宗はこれは所謂小乗の教でありまして、凡夫としての迷を取除いて、世間の累ひ、惱みを受けない位の事を



標準にして教へて居る。だからさういふ方では『三十四心斷結成道』三十四心といふのは、人間の迷を取除くに付て、どういふ點に氣を付けなければならぬかといふことを細かに分けて説かれたのが三十四箇條ある、これは餘り煩はしいから一々細かに申すには及ぶまいと思ひますが、さういふやうないろ／＼人間の迷を考へて、迷を除くだけをして主にして覺つたのがお釋迦様だと、斯ういふ風に考へて居る。そのお釋迦様を本尊として居るのだから、これでは佛の本當のお力といふものは判らない。

これは物の本末——本と末といふことをよく考へなければならぬので、末といふのは現はれた方、本といふのは現はれる根本、土台です。それで迷を除くといふことは末の方です。迷を除く爲の土台の心掛といふものが本の方です。すべて本と末を考へなければいけない。例へば非常に慾の深い人が居るなるほど人間が皆慾張つてお互に争ひ合つて居つた

日には、何時迄經つても世の中は善くならないといふことに氣が付いて、その争ひ合ふ心持をどうして無くさうかといくら考へても無くならないのです。それは詰り争ひを去るといふことは末の方だから、お互に争ひ合ふことを廢めよう／＼と思つても、何時迄經つても無くならないのです。それよりは根本を考へたら宜い、一體人間といふものは一人では生きて居られないのだから、お互に救ひ合ふといふ慈悲の心持を養へば、その結果争ふといふことが無くなつて行くのです。そこが幾度も申上げる小乗と大乘の違いです。人間は自分の缺點を考へて毎日いくらかヨ／＼考へて居つても、日常の生活のこの儘では善くなりはしない。世の中はだん／＼複雑になつて、だん／＼喧嘩の種が多くなるのですから、この喧嘩の種の多い世の中で、たゞクヨ／＼考へても善くなりはしない、此の世の中を少し離れて、モット超越して、本當の慈悲の心持を養つて來ると、

慈悲の心持が自然に心に一杯になるに随つて、争ひ合ふといふことが何時の間にか無くなる。斯ういふことでありまして、そこが非常に大事なことであります。

何時でも私共は消極的の考ではいけない。悪い方ばかり考へて、悪い方をどうして無くしようかと思つてもそれはいけない。善い方の力を養つて行けば、その善い力が現はれて來て、結局悪い方がそれで消えてしまふ、斯うなつて行くのであります。洵に詰らぬ譬のやうでありますが、一月二月の寒い時に斯ういふ部屋に來て見ると氷が張つて居る、體が震へる『どうしたらいいだらう』と言つてもどうにもなりはしない。火を起せば宜い、さうして部屋が暖くなれば、自然に震へも止まれば氷も無くなる。火を起さないで、たゞ『どうしたら震へなくなるだらう』と言つて居つてもしやうがない。それと同じことであります。随分骨が折れるけれども、吾

吾は佛様をお手本として、又諸菩薩をお手本として進んで善い事をするやうに努めるより外に仕方がない。進んで善い事をして、それが自分のものになれば、何時とはなしに自分の心の迷が無くなつて行く。何時迷が無くなつたのか氣が付かないけれども、自ら迷が無くなるのであります。腹が減つて來れば頭がボンヤリして來る、頭がボンヤリすれば目暈もして來るのですが、目暈がすると言つて仁丹を嚙つても實丹舐めても駄目です。飯を食つて腹を一杯にすれば自然に目暈もなくなつてしまふ。土台を作らなければ何にもならない、それを言つて居るのです。今の世の中は皆相對立して争つて居る時代だから、慈悲の行ひをすることは非常に骨が折れるけれども骨が折れても努めてそこに力を打込んで行けば、争ふとか闘ふとかいふ氣分が自然に無くなつて行く譯でありませう。これは一つの例であります。總てさういふ譯で、本と末とを辨へなければならぬの



です。

それを今こゝに言つて居ります。『三十四心斷結成道』自分の心の迷を除くだけで、それで佛に成ると思つて、佛そのものは永遠の生命を有つて、無限の慈悲、無限の智慧を具へて居らつしやるといふ、そこに考へ及ばぬといふことであれば、それでは佛様といふものが本當に判つて居るのではない。佛様は迷を除くだけが佛様ではない。本來具へて居るところの大慈悲の心持、大きな智慧がスツカリ擴がつた、その結果として自然に迷が無くなり、自然に惱みが無くなつたといふのが佛様です。その尊い性質が發揮されての佛様である、迷が無くなつただけで佛様になつたのではない、それは本と末との順序が違ふ。さういふ觀方が互の毎日の修行の上になつても大事なことであります。勿論自分の過ちを慎しき間違ひに氣を付けることは忘れてはなりませんけれども、併しその方ばかり考へて居つてもなか／＼善

くならない。進んで善い行ひをするといふ大きな慈悲の力を養ひ、大きな智慧を磨いて行かうといふ風にならなければ、本當にはならない譯です。それを考へないで、唯だ迷を除いただけが佛様だと思つて居るのは、テヨウド『天尊の太子』一國を治める天子様のお子様、頭が悪くてボンヤリして、自分一般の平民の子だと思つて居るのと同じである。吾は佛に成るべき尊い性質があるのに、それを忘れて、何でも人間は罪の子だ、迷の子だといつて、悪い方ばかりをクヨクヨ考へて居るといふことは、極く淺い考へであると言はなければならぬ。

華嚴宗・眞言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり。法相・三論は勝應身にいたる佛を本尊とす。天王の太子・我父は侍とおもふがごとし。  
それから華嚴宗・眞言宗・三論宗・法相宗といふ

やうな宗旨は、前の俱舍・成實・律といふのとは違つて、大乘の方の、所謂菩薩の行を勸める宗だからこれは餘程上だけれども、これもまだ法華經に比べると低いので、法相・三論では勝應身に似たる佛を本尊とする。『勝應身』といふのは前にも申し上げたと思ひますが、斯ういふ風に區別します。



『法身』といふのは佛の本來の尊い性質が現はれたもの、それから『報身』といふのは佛の廣大無邊なる智慧の現はれたもの、それから『應身』といふのは佛様の慈悲の働きを謂ふのでありますが、その慈悲といふものは、一切の人間が苦しみ惱んで居りますから、その一切の人間の苦しみ惱める所に身を現

はして、彼等の望に應じて、それ／＼尊い教をお與へになつてお救ひ下さる、これを應身といふ。しかしながらその一切の人を救ふといふ働きは、それは要するに佛様の具へて居らつしやる智慧の現はれたものに外ならない。佛様御自身が智慧がなくて、御自身に迷があつて、人を救へたり人を救つたりなさることの出来る譯はありませんから、即ち報身の現はれたものが應身であるに相違ない。さうしてその應身、即ち一切の人を救ふ働きといふものが二種あつて、即ち人間の迷を説いて、その迷を除くことをお教へになる方は『劣應身』劣といふのは低い方の救ひ方。それから『勝應身』は勝れた方、勝れた方といふのは先刻申したやうに、善い事をすることを教へる。慈悲の心持を以て一切に接しなければならぬ。世の爲、人の爲に力を盡すことに大いに心を向けなければならぬといふやうにお教へになる、それが勝應身であります。その劣應身といふのは、



所謂小乘の教をお説きになる間のことと謂ふのであり、勝應身といふのは、大乘の教をお説きになることを謂ふのであります。けれども大乘、小乗の教をお説きになるといふことは、畢竟、佛様御自身の具へて居らつしやる廣大無邊なる智慧の働きに過ぎない。その根本が判らなければ、その慈悲の働きがどんなに有難いかといふことは判らない譯です。それを法相宗・三論宗などでは「勝應身に似たる」即ち大乘の教を説いて、一切の人をお救ひになるといふ、そこだけを本にして佛様が有難いと言つて居るそれはチヨウド天子様のお子様か、自分の親が天子であるといふことを知らないで、侍だと思つて居るやうなものである、斯ういふのです。

この日蓮上人の批評は、餘程氣を付けて考へないといけない。何故かと申しますと、慈悲の働きは智慧の現れだといふ議論なのです。慈悲の働きを捨てて智慧だけ重んじろといふ議論ではない。それを取

いふことをこゝで言ふのです。慈悲の方ばかり考へてはいけないといふことは、慈悲は詰らないといふことではない。そこは間違へてはいけない。動もするとそこを間違へる。どうしても根本の智慧を養ふならば、慈悲になつて現はれざるを得ない。慈悲になつて現はれないやうなものは、それは智慧の無い者である、本當の根本が出来て居ないやうなものだ斯ういふ議論になるのです。

それは開目鈔を全部読んで後でお考へ下さると解りますが、日蓮上人に二つの自己に對する批評があります。一つは「難を忍び慈悲の勝れた」といふことであります。日蓮は有ゆる難を忍んで、さうして一切の人間を救ふ爲に骨折つて居るのだから、自分は最も慈悲の勝れた者だと言つて居られる。ところがその慈悲の勝れた者だといふ日蓮上人が「智者に我が義破られず用ひじとなり」自分より智慧のある人が出て來たら、自分は何時でも降参するけれど

り違へてはいけません。智慧があれば自然に現はれて、それが一切を救ふのです。自分に智慧があつて人を救はずには居られないのです。何故なら自分が智慧が勝れて居れば世の中の事がよく判る、世の中の事がよく判れば、世の中の悩み苦しんで居る人の状態がよく判る。よく判ればこれを捨て、置く譯に行かない。だから智慧があつて慈悲の無いといふ筈はない。智慧といふものと慈悲といふものとは續きナンです。若し世の中の氣の毒なことは判つて居るけれども救はないといふ者があれば、それは嘘です。本當に判つて居れば救はずには居られない。だから智慧と慈悲とは必ず續きナンです。けれどもその根本の智慧を養ふことを捨て、置いて、慈悲だけの所をやると本當の慈悲は出来ないのです。人間の性質が判らないで、人間の本性が本當に判らないで本當に救ひを與へるといふことが出来るものではない。だから慈悲の方ばかりを考へてはいけませんと

も、智慧の上で自分が負けない間は、自分の主張は捨てないぞと言つて居られる。この二つの事はよく考へなければならぬ。慈悲が主であると言ふかと思ふと、智慧が主だと言つて居られる、自分より智慧のある者が出来ない限りは自分の主義は曲げないと言ふ。だから慈悲と智慧とは同じことであつて、本當に解れば一切の人を救はなければならぬ。又一切の人を救ふ爲には自分の智慧を磨かなければならぬので、智慧と慈悲とは決して離れることは出来ないといふことを能く説いて居られるのであります。ところが是はウツカリすると、どつちか一方に偏し易いのです。甚だ世の中の悪口を言ふやうだけれども、慈善事業とか社会事業とか言つて——それも善い事だがそんな事ばかりやつて居つて、自分の信仰の根本を養はない人も随分ある。それでは折角世の中に爲にやる事が徹底しない、何だか世間の風潮に追はれてやつて居る、結局何の爲にやつて居るの



か判らなくなつてしまふ。斯ういふ人が随分ある。又一方は智慧の方ばかりやつて居る。「何の經にどうあつて、佛様がどうで、菩薩がどうで……」といふやうな事ばかりやつて居る。その方ばかりに固まつてしまつて、實際世の中に働きが及ばない。これは各々偏するところがあるので、本當に言へば磨かれた智慧は慈悲となつて現はれなければならぬし、廣大なる慈悲の行ひは深い智慧から出て來なければならぬのであつて、決して偏るべきものではない。一つにならなければならぬのであります。しかし私共は凡夫でありますから、兎角どつちにか偏り易いので、理窟を言ふ方は理窟ばかり言つて居る、又實際の仕事をして居る人は實際の事ばかりやつて居るといふことになつて、正しい中庸を得た信仰を得るといふことが難かしいやうでありますから、そこらは餘程氣を付けなければならぬことでせう。今この所はそれを言はれて居ります。成程佛様の

まして、佛の廣大な智慧を譬へたものであります。それから眞言宗の方では大日如來といふ佛様を本佛として拜んで居るといふことは前にも屢々申し上げました。斯ういふやうな盧舍那佛といつても、大日如來と言つても、要するに法華經の壽量品にあるところの本佛の現はれたものに過ぎないので、その本佛が娑婆世界に釋迦如來となつて現はれて居らつしやるのである。これを捨て置いて、盧舍那佛が一番大事だとか、大日如來が一番大事だと言つてこれを本尊として居るのは、チヨウド天子様の子が、自分の親は身分が高いといふことを忘れて、氏素性もない他の者が法王といつて、教を説いて人の上に立つて偉がつて居る、その者を尊敬して、自分の親よりあの方が偉いと思つて居るのと同じことである。これも娑婆世界に生れた吾々としては、自分に特に縁の有るところのお釋迦様を描いて、自分と懸離れた他の佛を拜んで居ることであつて、どうも正しい道

慈悲の働きといふものは大事だけれども、その佛の慈悲の働きは、佛の廣大なる智慧の現はれたものといふ土臺を突止めなければならぬ。その土臺が判らないで、たゞ佛様は斯ういふ働きをして居られる。世の中の人の爲にこんな慈悲を掛けて居らつしやるといふことばかり言つて居るのは、根本を忘れた考。なんだから、チヨウド勝れた王様の太子が、自分の親を侍だと思つて居るやうなものである。

華嚴宗・眞言宗は釋尊を下げて盧舍那の大日等を本尊と定む。天子たる父を下げ、種姓もなき者の法王のごとくなるにつけり。

それから華嚴宗の方では盧舍那といつて盧舍那佛を本尊とする。奈良の大佛様といふのがこの盧舍那佛の相を表はしたものだと言はれて居りますが、「盧舍那」といふのは光が普く照らすといふ意味であり

を得たものとは言へないのである。

淨土宗は釋迦の分身の阿彌陀佛を有縁の佛とおもひて教主をすてたり。

それから淨土宗に於ては、お釋迦様の分身であるところの阿彌陀佛を有縁の佛と思つて居る。これは前に法華經のお話を申し上げました、その時分に居られた方は御記憶でありませうが、法華經にその事を明して居る。一つの佛様が現はれて方々の佛になつたのだ、その一つが西方の淨土に現はれた阿彌陀佛であつて、その一つがこの娑婆世界に現はれた釋迦牟尼佛であるといふことが言つてある。だから根本の本佛といふ一つの佛様の現はれたものが西の方に رفتた阿彌陀如來であり、東の方に رفتた藥師如來であり、娑婆世界に現はれた釋迦牟尼佛でもあるといふことが、法華經の中に明言してある。それだから本佛といふ一つの佛様が現はれて、阿彌陀佛ともなれば、多寶如來ともなり、藥師如來ともなれば、



釋迦牟尼佛ともなつたのだ。斯ういふことである以上は、娑婆世界に生れた吾々は、特に娑婆世界に於て佛にお成りになつた釋迦牟尼佛に歸依すべきである。洵に俗な譬だけれども、日本といふ國があつてその日本が分れて東京府・京都府・大阪府・神奈川縣・埼玉縣となつて居るのであるから、東京府に住んで居る者は、東京に住むといふことに依つて日本國民たる本分を全うするより外はない。東京府に住んで居る者が埼玉縣に税を納めたり、神奈川縣のお祭に行つても神樂をやつたりして、自分の住んで居る東京を疎かにするとしたら随分變なものでせう。何も吾々は、東京だけが良い所とは思はぬ。しかし東京に住んで居るのだから、東京の爲に力を盡すことが即ち日本の爲に力を盡すことになるのです。大阪の人は又大阪の爲に力を盡すことが、日本の爲に力を盡すことになる。それと同じことで、吾々は娑婆世界に住んで居る、さうしてこの娑婆世界に、前

に申した本佛が特に釋迦牟尼佛となつて現はれて、吾々に教を興へられるのであるから、娑婆世界の吾吾として、釋迦牟尼佛に歸依することに依つて、同時に宇宙の絶對の佛に歸依する、これが一番いゝ道なのです。それを娑婆世界のことを捨て、置いて阿彌陀佛を有難がつて見たり、大日如來を有難がるといふのは、東京に住んで居りながら大阪の事や埼玉縣の事を氣にして居るやうなものです。それは大阪の方に洪水が出たら救ひに行くのはいいけれどもしかし東京に火事のあるのを捨て、置いて、自分の家は焼けても構はないで大阪の洪水の見舞に行くと言つたら、随分をかしい事に相違ない。それと同じことです。何もこの世に偏るといふのではないけれども、兎に角吾々はこの娑婆世界の者だから、娑婆世界を捨て、他の佛に歸依し、他の淨土に憧れるといふのは愚かな事である。それを言つて居るので、阿彌陀佛は釋尊の分身である「釋迦」といふの

はこゝでは本佛といふ意味で言つて居りますが、その本佛の分身である阿彌陀佛を、自分達に縁の有る佛と思つて居る。尤もそれは無理はないのです。



一番初めの信仰は淨土も穢土もない、ごちや／＼です。ごちや／＼といふのは、この世で自分の欲望を全うする爲に佛様を拜んで居る。その時には淨土と穢土がごちや／＼なのです。今でもさういふ人があつて居る。この世の中で自分の欲望を満足させる爲に信心をする、それでは淨土と穢土とは分りはしない。「金が儲からないから儲けさせて呉れ」「頭が痛いから瘡して呉れ」……それは淨穢同居で一緒に居るのです。この世で何だか佛様や神様と向ひ合つて居るやうな

氣になる、そしてこれを相手に註文をする。こつちの佛様には「頭が痛いから瘡して呉れ」こつちの神様には「景氣が悪いから景氣を直して呉れ」と頼んで居る、これは淨穢一緒なので、凡夫の吾々と佛様や神様とが同居して居ると思つて居る。さうして勝手次第に頼んで居る、斯ういふ信仰もある。これは極く幼稚な信仰であつて、淨土と穢土がごちや／＼になつて居る信仰であります。それに比べれば、今度は淨土と穢土と離れた考、これは少し上です。



この世は穢土だから、此處で彼此考へても仕様がなない。例へば金が無いから儲けさせて呉れと頼むけれども、儲かつて少しも人間幸福ではないのだ。どうも景氣が悪いから景氣を好くして呉れと頼むけ



れども、景気が好くなつてもやはり幸福は無いのだ  
斯ういふやうに考へて来るのは、穢土から離れた淨  
土を考へるのです。この世では到底駄目だから、こ  
の世の事は思ひ捨て、別な所に淨土を求めなければ  
ならないと考へる。こゝに來ればまア一段の進歩  
です。

それからモウ一段進むと、結局、この穢土がスツ  
カリ淨土になつてしまふ。

淨土

ナニも淨土といふものを外に探すに及ばない。要す  
るに自分達の心持が間違つて居るからしてこの世が  
穢土なのである、自分達も互の心持をスツカリ變へ  
て行けば、此處が淨土になるのだ、淨土を他に求め  
るには及ばない、斯ういふやうに三度目にそこに戻

儲けの神様を並べたり、頭や足の痛いのを癒す神様  
を並べたりして居る。だから口先では今の三番目の  
所に行つたやうな事を言ひながら、やはり最初のも  
のに戻つて居る。ゴタ／＼に淨土も穢土もありはし  
ない、相對づくで頼んで居る。これに比べればあの  
淨土を理想とする宗教の方は、低いやうな教だけれ  
ども、まだ／＼良い所があるのと／＼思ふのです。  
しかし本當の佛様の信仰はさういふものではない  
この世の願を掛けるといふ事はないのであります。  
それは勿論信仰の結果が此世に利益を及ぼすといふ  
ことは否定しない、人間が本當の信仰をすれば自分  
の心持が變りますから、自分の心持が變れば、今迄  
出来なかつた事が出来て來るといふことは不思議は  
ない。だから現世の利益といふことを日蓮上人も仰  
しやつたが、それは不思議ではない。自分が生れ變  
つたものになれば、確に今迄出来なかつた事も出来  
て來るに相違ない。それですから無論宗教に現世の

つて來るのであります。勿論穢土と淨土とを離して  
考へるといふことも、順序として無駄ではありませ  
ん。前のやうに淨土と穢土とをごちや／＼に考へて  
居るより此の方が餘程上です。甚だいろ／＼な宗旨  
の悪口を言つて濟まないやうですけれども、今の淨  
土宗とか眞宗とかいふものが、何だかこの世を離れ  
て別に淨土を考へて居るといふことは馬鹿々々しい  
譯であります。尤もそれも良い所はある、といふの  
は、佛様にこの世の願を掛けるといふことをしない  
唯一心に佛を念じて「どうぞ宜しく願ひ申します  
お任せ申します」といふ、そこだけはいろ／＼な註  
文をするより餘程いゝ譯です。だから淨土宗や眞宗  
のお寺に行つて見ると、兎に角お寺の内にいろ／＼  
なものをごちや／＼祀つて居ないだけは氣持が好  
い。日蓮宗などは、甚だ悪口を言ふやうだけれども  
法華だ／＼と言ひながら、お稻荷様を祀つて見たり  
不動様を祀つて見たり、いろ／＼な事をやつて、金

利益があるといふことは決して私は否定しない、  
日蓮上人も否定をして居らつしやらない。しかしそ  
れは自分の心持が變るから、事實の上には違つた結果  
が現はれるといふことなのであつて、自分が元の空  
阿彌で少しも變らずに居て、ただ信心したら直ぐ事  
實の上に御利益が現はれる……そんなことをお經の  
何處にも言つて居ない、これは餘程考へなければな  
らないことです。どうもその所が彼此れ絡がつ  
て居りまして、法華經々々と言ひながら、法華經  
は今の順序で言へば第三番目に屬するのだと言ひな  
がら、方々のお寺で初めの淨土と穢土のごちや／＼  
になつたやうな事をやつて居るのは恥かしいことで  
はないかと思ふ。無論人間は身を持つて、物質の世  
界に生きて居るのでありますから、身を捨てろ、物  
質を忘れろとは言ひませんけれども、しかし心の立  
て方に依つて身をも支配して行くことが出来る、物  
質の世界のいろ／＼な變化の中でも、それに煩はさ



れないやうになつて行くといふ、その土臺を捉まへなければいけないのです。本と末と取り違へるとさるで信仰はごちや／＼になつてしまふ。そこは唯御利益主義だけでもいけませんけれども、又何でもこの世を離れてしまつて……といふだけでもいけない譯です。そこで淨土宗の如きは、この世の中を離れて、たゞ別の世界の佛ばかりを信ずるといふことになつて居りますから、それはどうもいけないと言はれる譯なのであります。

禪宗は下賤の者一分の徳あて父母をさぐるがごとし。佛をさげ經を下す、此皆本尊に迷ふ。

それから禪宗の方では「見性成佛」といふことを言ふ。見性成佛といふのは、自分の本當の性質が判れば、それで佛に成れるといふのです。これは一部分理窟があるのです。何故なら前から屢々申上げるやうに、人間には佛性といふものがある、尊い佛と

相通する本性があるのであつて、教も道も何も知らない者でも、親として子を慈しむことを知つて居る子として親に懐くことを知つて居る、夫婦相和することを知つて居る、兄弟睦睦むことも知つて居る。だからそこから言へば人間の本性といふものは尊いに相違ない。その人間の本性の尊いことがよく解れば、それから佛になつて行けるといふのですから、見性成佛といふことは一通り理窟があるので、しかしながらその尊い人間の本性を養つて育て、大きくするのは、佛様の力を借りないではいけない。成程本性は尊いけれども、それをその儘にして置いていくら一人で坐つて考へても、なか／＼人間は善くならない。だから本性は尊いに相違ないが、その尊い本性を養ふ爲の教といふもの、道といふものを求めなければ尊い本性は無駄になつてしまふ。そこが十分に考へられないといふことは、これ亦一方に偏つて居るのです。それであるから禪宗の方で、

本當に坐禪などをして心の本性をテツと自究める人は、やはり佛に歸依する心持を有つて居る。例へば曹洞宗を創めた道元禪師の如き、徳川時代に於て禪宗の中で殊に勝れた人と言はれた白隠禪師の如き、皆晩年は法華經を讀誦して、法華經の信仰を勵んで居るのです。それはどうしてもさうならざるを得ない。何故なら、自分といふもの、本性を大きくするには、偉大なる佛といふものと心が通ひ合ふことになければ、たゞ限られた人生の事だけ考へて居たのでは、自分の尊い性質といふものは十分大きくならない。自分の本性が尊いと思へば思ふ程、その尊い本性を大きくする爲に佛様に歸依する、斯ういふ心持がなければならぬ。でありますからやはり信仰といふものは、佛を離れ、又佛の教を離れて出来るものではないのです。それを生ざとりすると、「ナニ佛も何も要るものか」といふことになる。尤も禪宗の方ではなか／＼奇抜な話がありまして

寒い日に和尚さんが本堂に出て来て、どうも寒くて仕様がなと言つて、佛様の像を引下してそれを鋸で割つて焚火をして、それで尻をあぶつたといふ話がある。それが大變面白い話になつて居る。しかしそれは、自分の修養を忘れて、たゞ佛様に福を祈るといふ人の迷を打破る爲に、さういふ奇抜な事をして見せたのであつて、決して佛様をどうでも宜いといふ譯ではない。餘り右の方へ行き過ぎると、左の方に引張る必要がありますから、さういふ奇抜な事もして見せたのでせうけれども、其の事が大勢の人の手本になる行ひではない。まアさういふ話は面白い話ですから、吾々も子供の時分には喜んで讀んだものです。「佛様を火に焚いて尻をあぶつた、あゝ面白いナ」と思つたのであります。それは世の中の弊害を矯める爲にさういふ極端な事をして見せた人もあるのでありませう。これを以て一般の手本にはならない。兎角偏るといふことがいけないのであり



まして、たゞ佛に福を祈るといふこともいけないのでありませうけれども、又佛を無視し、教を蔑ろにするといふことも決して善い事ではないのであつてそこは偏らないやうにしなければならぬ。

私は乃木大將に一二度お目に掛つたことがあつて、如何にも乃木さんといふ方は落着いた方だといふことを知つて居りましたが、チョウド乃木さんが學習院長をして居らつしやつた頃に、東京に電車の同盟罷業がありました。其の時に、私の知つて居る者で、チョット名前を言ふのは氣の毒ですから申しませんが、乃木さんに『どうも電車の車掌がストライキを致しました、怪しからん事です、大勢の人の交通の不便を考へないで、自分達の待遇を好くしろといふやうなことでストライキを起した、怪しからぬ事です、どうも今の世の中は仕様がありません』斯う言つて話した。無論乃木さんはあゝいふ嚴格な方だから、怪しからぬと思つて居らつしやるだ

らうと思つて、意を迎へる積りで話した。すると乃木さんは『あゝさうですか、大勢の者がそこ迄やるのでは、よく／＼何か事情がありませうナ』と言はれたので、其者はすつかり弱つてしまつた。それは無論世の中の秩序を亂すのは悪いから、乃木さんのやうな方はストライキなどには賛成はなさらぬでせう、けれども大勢の者がそこ迄行くのには、何か已むに已まれない事情もあるだらうといふことを、一應考へて見てやることも必要です。その話した者は大將の御機嫌に叶ふ積りで言つたところが駄目になつてしまつて、大いに弱り返つて、『どうもあの親爺はなか／＼油断がならないヨ』と言つて私に話しましたが、成程さうです。實際油断はならないので乃木さん程の人になると、さう一本調子には行かない。右からも考へれば、又左からも考へるといふ心持で始終居られたらしい。總て偏つてはいけない。たゞ佛様に頼つて、何でも自分の欲望を満たすとい

ふ考は幼稚な考だけれども、さればといつて佛様にも頼まない『俺一人で……』といふのも亦偏つた考であつて、そこに偏しないやうな、所謂中道を求めるといふことが必要なのです。

そこで禪宗の方では、下賤の者が一分の徳があるからといつて父母を蔑ろにするやうなものである。自分に尊い佛性を具へて居るといふことは宜しいけれども、そればかりを頼りにして、親とも言ふべきところの佛様に頼るといふ心持を捨て、しまつて、佛を侮り、經を下すといふことはいけない。自分の爲すべき事もしないで、佛に頼ることは愚かな事であるけれども、さればと言つて自分ばかりを頼りにして、佛を捨てるといふことも間違つた考であつて、自分に尊い佛性の具つて居るといふことを知ると共に、これを育て、大きくする爲には佛に絶對の歸依をする、佛の教といふものに頼りすがつてこれに依つて自分の尊い佛性を發揮することに努め

なければならぬ。そこが所謂本尊といふものと、自分の心持とが相通する道である。これを忘れてはならないといふことを言つて居られるのであります。

日蓮上人と申しますと、何か非常に激しい方のやうで、諸宗を皆攻撃して自分一人で偉がつて居るといふ風に、世間では誤解して居りますが、開目鈔の斯ういふ文章をよく読んで見ますと、決して偏つた方ではない。右に偏るものは左に押へ、左に傾くものは右に抑へて、本當の中正の道を執つて、佛の教と自分の心持と相通することを信仰の所詮とする方であるといふことが、よく判る筈であります。その邊を日蓮宗以外の人が誤解して居るのみならず、動もすれば日蓮宗、法華宗と言はれる人々が日蓮上人を誤解して、何か一本調子で突き進めば宜いやうに思つて居るといふことは残念なことで、何とかして本當の日蓮上人の御精神を發揮するやうに努めたいものだといふことを熟々感ずる譯であります。(了)



## 偶感

妙華 金子光和

立正大師

八万多羅是一言

遺文都在信衆思

明徴國體警時世

至聖眞成上行尊

神州

東方屹立是神州

聖德隆昌日月伴

一系天皇皇統正

忠良經國仰鴻猷

## 成佛と淨土論

中村清一

今日は大震災十五周年の記念日に因みまして、チヨウド震災の光景と反對であります淨土の事に就て申上げようと思ひました。ところが昨夜から今朝に掛けてあのやうな暴風雨がありまして、非常に慘澹たる光景を呈しまして、この淨土といふ事に就て申上げることは、一層その責任が重いやうに感ずるのであります。

私が淨土に就て申上げるといふことは、勿論非常に僭越であります。唯だ經文並に祖書に書いてありますところを少しばかり御紹介すると共に、經文や祖書を拜讀します時に、殊に法華經壽量品を拜讀します時に、それを文字通り忠實に讀む、そこへ理窟を附けていろ／＼難かしく讀むのでなくして、そ

の文字通りを讀むといふことに依つて、この淨土の信念が成立つのではないかと思ひます。ですから只今拜讀致しました二三の御遺文なりお經なりを暗記して居りまして、昨晚のやうな場合、或は大正十二年の大震災のやうな場合に、穢土は斯うであるけれども、一つ幕を切つて落とすと思ひます。斯ういふ相であるといふ事を覺えて居りますと、非常にもそこに感激が湧いて参ります。それに依つて信仰を増進して行くことが出来るのでありますから、經文を出来るだけ忠實に讀むといふことが、淨土の信念を得る根本であらうと思ひます。

この前私は講習會に於きまして、實在といふことを求めるのが宗教であるといふことを申上げまし



た。さうしてその實在を本當に得られるといふのは何としても悟りを開かれた釋尊の教に従つて、釋尊の仰せらるゝ通りを實行し、仰せられる通りに未來に果報を得られるものとして、樂しみにして居るといふ事より外ない、どうしても釋尊の悟りを措いて佛敎といふものは成立たないし、吾々の信念といふものも成立たないといふ結論を申上げて置きなした。併しその中でまだ完結しないところが澤山ありますのでそこから申上げますと、例へば十二因縁を申上げて有を滅するといふ事を申上げました、有を滅するといふのは吾々の動物的な本能生活を滅するといふことである。それならばそれを滅したらどうなるかといふやうな事に就きましても別に説明を致しませんでしたけれども、要するにこの實在を得たその境界が、即ち壽量品にお説きになつて居るその儘の境界でありまして、其點をチョット關係附けて申上げて見ようと思ひます。

先日申上げました通り、吾々の生命は食物に依つて繋かれて居るのでありまして、吾々の普通食へる物を佛敎では攝食たたくじといふ言葉を使つて居ります。

い肉體を得る爲にやはり生死といふものがあります。或は却て下の方へ下つて來る場合にも同じでありますけれども、さういふ生死を『變易の生死』と申します。佛様に成りますと分段の生死も變易の生死もスツカリ破られて、生死の全くない境界に居らつしやるのであります。と言ふのは、やはり佛様の覺りから出て來るので、別に理窟から出て來るのではないのです。佛様御自身がそれを體得せられ吾々に教へて戴く、その最も徹底した佛様の有様が、即ち壽量品に説かれた壽命無量といふ佛に成つて居ります。

吾々は實在と申しましても、やはり佛に成るといふ、所謂成佛といふことが最後の實在の要訣であるといふことは申す迄もないことと思ひます。併し成佛に就きましては今日は立入つて申上げる事がないのでありまして、又細かに語ると一念三千の理論になつてしまひますから、唯だ佛様のやうな方に成るといふことを樂しみにして居るのが吾々の成佛意識です。だから成佛と申しましても、やはり吾々の求めるところが佛様のやうな方に成りたいといふこと

れども、吾々よりも少し程度の高い聲聞・緣覺・菩薩といふやうな方々になりますと、法喜食とか禪悅食とかいふ食物を攝ると言はれて居ります。さういふ聲聞・緣覺・菩薩といふやうな方々になりますと現在ではさうでもありませんが、將來に至つて、所謂有を滅したといふ時には、法や教を味はつて、それを喜んで居るのが生命の種である、或は禪定に入つて心が落著いて居る間が、さういふ方々の壽命であるといふやうな風に説かれて居ります。それが段々と進んで來まして佛様に成ると、今度は『功德を以て壽命となす』といふことが本則になつて居ります。それで吾々の生命は『分段の生死』と言つて、この間申上げたやうに生物學的の生命でありますから、人間は五十年、鶴は千年、龜は萬年といふやうな、さういふやうな壽命は生物學的に決定されて居ります。ですから必ず死ぬ、それを繰返して段々と段階が幾つものつけられて居りますから、それを分段と申します。それに對して、今申上げた菩薩とか聲聞・緣覺とかいふ方々は、段々と階級が進んで行く度毎に自分の肉體を去つて、さうしてそれよりも高

を考へるのでないと、成佛は得られないのでありまして、佛様といふ方は常に一切の者を救ふ事ばかり考へられて、日夜にその事を實行して居られる、さういふ方が佛様でありますから、吾々は小さいながらもやはり菩薩行を勵んで、世の中の爲に盡して行きたいといふ事を實行して居る、それを實行し又非常にそれを強く志願します。この間磯部先生のお話がありました四弘誓願の中に、『衆生無邊誓願度』といふのがありました、多くの衆生を救ひたいといふ、その志願から成佛といふものが得られるのであります。吾々の願ふところと吾々の得るところとは、チヨウド函と蓋とがピッタリ合ふやうに合つて居なければならぬのであります。ですから私共はさういふ風な菩薩の行ひをして、菩薩の志願を持つて居るから成佛が得られる、さういふ事が非常に大事であると思ひます。要するに吾々が壽量品に説かれたやうな佛様と同じやうな者に成るといふことがそれが成佛であることだけを考へて居れば宜いと思ひます。

それで淨土に就きましては、淨土の實在といふこ



とと、淨土の有様、その相といふことと二つに分けて考へて見る必要があるのですが、淨土の實在に就きましては、やはりこれは壽量品の經文を文字通り信ずることが、その實在を信ずることになるのです。ですから壽量品の經文から出發して、淨土の實在の事を少しお話ししまして、それから——まア淨土の相は私共に判らないのでありますが、經文にあり又祖書に語られてあるところを拜讀したいと思つて居ります。

申す迄もない事ではありますが、私共の信仰は壽量品に依つて定まらなければならぬ。壽量品も亦本當のものでなくて、壽量品の底に在る、壽量品の奥に在るものの方が尊いのであるといふ考へ方を教へる一派もありますけれども、それは間違つて居るのであつて、何處までも壽量品の文の儘が最も尊いのであるといふことを信じなければならぬと思ひます。お釋迦様は悟りを開かれました時に、壽量品の悟りを持つて居られた、併ながら直ぐこれを説くことは皆に解らないといふお考へから、華嚴、阿含、方等、般若といふいろ／＼の段階を経て参りまして

ます。ですから壽量品は全く文字通りにこれ信じなければならぬ。それで日蓮聖人の門下に於きましても、やはり壽量品に依つて信ずる開目鈔の立場を最も高しとしなければならぬのでありますけれども、途中で幾らか脱線しまして、天台學の方へずつたり、眞言の方へずつたり、いろ／＼のずり方があつたのでありますけれども、それに對して我が本多日生恩師は、さういふ點を訂正されまして、やはり壽量品中心の信仰といふ事を、一代に亘つて力説されたのであります。これは私の一種の懺悔のやうなものであります。が、實は私は本多上人がこの本佛の實在といふ事を中心にしてお説きになつたといふことを、講演を承つて居ながら最初は氣が附かなかつたのであります。が氣が附いたのがチヨウド大正十二年九月一日の大震災の前後の事でありました。チヨウドあの頃本多上人の本を讀んで見てそれに氣が附いて、いろ／＼考へて居ります時にあの震災に遭ひましたから、非常に有難かつたといふ經驗を得て居ります。

さういふ譯でありますから、壽量品は全く文字通

さうして最後に法華經の教をお説きになつた。ですから法華經の覺に出發して、輪を描いて最後に法華經に還つたのが釋尊の一代の教化であります。釋尊以後に於きましてもやはりその通りであつて、小乗から先に發展して次に大乘に發展し、大乘の中でも權大乘より實大乘となつて天台大師が法華經を弘められた。さうしてモウ壽量品の意味合を極く近い所までお弘めになつたのでありますけれども、時至らずして天台大師はありの儘に壽量品をお説きにならなかつた。それを日蓮聖人が最後に畫龍點睛を加へられて、壽量品に依つて教を立つべしと言はれ、一切經の中では法華經の中の壽量品と、その前後の二つの半分、即ち一品二半の外は眞實を説いて居ない斯う言つたら皆さだめし吃驚りするであらうけれども、實はその通りである、どうしても壽量品に依つて信仰を決定せよといふことをお教へになりました。それでありながら尙且つ壽量品を文の通り信じないで、そこに方便の意味合が含まれて居るやうに考へるならば、吾々は一體何に依つて悟りを開き、何に依つて成佛を期して宜いのか判らないのであり

りに拜讀する方が宜いといふことを考へて居ります。經文に依りますとその第一に  
汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。  
(如來壽量品)

とあります、お前達は佛の本當の言葉信じなければいけないと佛様が仰せられて居ります、さうしてこの言葉を三通も繰返して仰せられましたといふことは、壽量品は眞實の教であるといふ事を非常に念を押してお説きになつたのであります。その後は何をお説きになつたかと申しますと、申す迄もなく佛の壽命の長いことをお説きなつて

我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由  
佗劫なり。(如來壽量品)

とお説きになりました。これは今までの教に於ては、印度の菩提樹の下で悟られたのが釋尊の初めての悟りであつたといふ風に考へて居つたのであります。それは根本的に誤りであつて、本當の成佛といふ事は無限に古いのであるといふことを仰せられたのがこの文であります。こゝに『我實に』と書いてある『實』の字を、やはり本當に文字通り讀まなければな



らないと思ふのでありまして、若しこの「實」といふ字があつても、やはり悟りを開いたのは印度が初めてであつて、印度で悟りを開かれたから絶対の佛様に成つたのだといふやうな考へ方は一つの誤りであります。それと同時に又、お釋迦様は「無始の本佛」であるから、成佛といふ事はないのだといふことを一概に考へるのは、壽量品に背いた考へ方であると思ひます。兎も角この「實」といふ字を讀んで、而もその後にある「無量無邊百千萬億那由佉劫なり」即ち一言にして言へば、無限の昔に悟りを開かれたといふことをよく考へることが、壽量品の理解になるのではないかと思ひます。それで悟りが開かれて佛に成られて、而も無限の昔といふことは非常に考へにくいことのやうでありますけれども、それは別段矛盾して居るものではありません。無限といふものの考へ方に就きまして、私共は數學で無限といふものを習つて居りますけれども、數學の無限は内容のないやうな無限でありまして、例へば空に何も無いのを見て、宇宙は無限に廣がつて居るといふ風な考へ方をします、さういふ無限に對して、太陽があり

或は月があり、その先に恒星があり或は天の川を見ると、あの天の川にはどんなに大きな望遠鏡を以て見ても、まだその先に乳のやうな色をした所が見える、つまり幾ら先へ行つても星があると考へられまゝです。さういふ風に内容の籠つた無限といふものは、やはりだん／＼遠く考へて行つて、結局無限であるといふことに依つて判るのではないかと思ひます。少し面倒な事を申しますが、羅什三藏がこの法華經を譯された時に、經典に書いてある「五百千萬億那由佉阿僧祇の三千大世界」云々といふ言葉これは非常に大きな數を現はす譬へを書かれたのであります。その譬へに擧げてあるのはどういふものかと言ふと、これは「數に寄せて非數を説く」のであると言はれた。數を説いて居るけれども、本當は數でない無限を説いて居るのだといふことを、羅什三藏が註釋を附けられて居るのであります。それはこれはやはりだん／＼遠く考へて行つて、結局無限といふ所まで延びて行く考へ方であつて、非常に奥深い、東洋的と申しますか、幽玄な考であると思ふのであります。

さういふ方面から壽量品は説きになつて居るのでありますから、壽量品の無量無邊百千萬億那由佉劫を解するに當りまして、「無量無邊」と言ふ時には直接に無限を考へ、「百千萬億那由佉劫」と考へる時には數を以て考へて、幾ら考へて行つても達することが出来ないといふ、結局非常に遠い無限であるといふ風な考へ方から行つた無限です、その二つの考へ方が壽量品の一つになつて居るところが非常に有難いと思ひます、一方は數に寄せて説き、一方は直接に非數を説く、或は有限を通して無限を説くか或は無限を直接に説くかといふやうな違ひであります。それで日蓮聖人はこの二つを區別してお考へになりまして、有限に寄せて説く時には「五百塵點」といふ言葉をお用ひになり、或は「久遠」といふ言葉をお用ひになつて居るやうです。又直接に無限と言ふ時には、「無始」或は「本有」といふ言葉を使はれて、本佛といふ時には必ず「無始の本佛」或は無作三身と言ふ時には「本有無作三身」といふ言葉をお使ひになつて居られます。それから成佛の事や、或は釋尊がこの娑婆世界に非常に因縁が深いといふ事

を仰しやるには「五百塵點」といふ言葉を使はれて居ります。或は壽命といふことを考へるにも、やはり成佛に關聯して居りますから、「五百塵點」(過去)乃至「常住不滅」(未來)といふ言葉をお使ひになつて居られるかと思ひます。ですからこの兩方から考へて、釋尊は本佛としては無始無終にこの宇宙に活動なさつて、一切の佛の活動は釋尊の活動であると直接に考へると同時に、釋尊が悟りを開かれたといふことは、釋尊は悟りを開かれたのでありますけれども而もそれは無限に古い、それを考へて行くには無限ではありませんが、一應有限の方から考へて行く考へ方が便利ではないかと思ひます、さういふ風に經文は親切にお説きになつて居られるやうに考へます。

その先の言葉を拜讀致しますと

是の如く我成佛してより已來、甚だ大に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫なり、常住にして滅せず。(如來壽量品)

終りの方の「常住にして滅せず」といふことは、未來の事を仰しやつて、未來は永遠に滅びないといふ



ことを、極く簡単な文句で仰しやつて居られます。その後

諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命今猶ほ未だ盡さず、復た上の數に倍せり。(如來壽量品)

とあります。是もやはり一應は文字通りに解釋し、さうして超越的な解釋を後から加へて行くといふことが、壽量品を味ふ途ではないかと思ひます。と言ふのは、釋尊の成佛された時機を假に考へて、さうしてその前には菩薩行があつたと考へるのも一應の考へ方で、その菩薩行だけを以てしても、今まで説いて來た五百塵點といふ壽命の倍だけの壽命を得ることが出来る、隨てそれが半分だけは現在にまだ餘つて居る、而もその後の、成佛してからの佛としての御活動の功德といふものは、全然まだ壽命になつて居られませんから、その後に又それだけの壽命が重つて居ります、今後も亦佛様が活動をせられま

となれば、釋尊の壽命は非常にあり餘つて参りま

す、非常にあり餘つて、結局それは普通の言葉で言へば處分に困る程あり餘るのでありますけれども、釋尊はその功德を私共にお與へ下さいませ。釋尊は謂はゞ藥を造る方であつて、妙法蓮華經といふ藥を製造せられる。謂はゞ娑婆世界製藥會社といふやうな、一種の娑婆世界に於ける藥を造る働きをせられて、さうしてそれを吾々にお與へになる、その藥は勿論無代で下さるので、營利とは違ふのであります。而も『妙法蓮華經』は單なる名前ではなくて、妙法蓮華經そのものが藥なのであります。さういふ藥を吾々にお與へ下さる。そこで會社で言へば販賣部長のやうな、吾々に直接與へて下さる方が即ち日蓮聖人であり、又その藥は何の役に立つかと言ふと、要するに吾々を成佛せしめる藥であります。ですから私共が『南無妙法蓮華經』と唱へて、釋尊の功德を戴くといふことは、釋尊に斯の如き非常に大きな功德があるといふことに依つて成立つ譯であります。

さて以上は釋尊の成佛せられた時を假に有限の年

數で考へましたけれども、それは單に一つの考へ方であつて、一應釋尊が成佛せられた時を考へたのであります。實はその時は無限に古いのでありますから、吾々は結局それを考へることが出来ない、成佛の時機を無限の彼方に押しやつてしまひますとき、成佛以前といふ考は消えてしまひ、結局どういふ事が残るかと思ひますと、第一には釋尊といふ一人のお方が佛と成つておいでになる佛に成つたと言ふと語弊がありますから、佛に成つておいでになると特に申します。即ち釋尊といふお方は一人のお方であつて、十界の全體でもなければ佛界の全體でもない、吾々と同じく血あり肉あり、情意を具へたお方であつて、やはり因果の法則に支配される御方である。而もその御方が一面から言へば本佛といふことになりませんから、一切の諸佛菩薩を統一するお方なのであります。第二にその釋尊の佛としての地位は何に依つて得られたかと言ふと、これは、もと／＼あつたものとして獨斷的に斷定されるものでなくてやはり菩薩行に基いて居る、菩薩として善い行ひをされたそれに依つて佛と成つて居られる、即ち釋尊

は、一面から言へばやはり吾々が佛に成つて行くときの模範となつて居られる意味合が残つて居ります。それから第三には、釋尊の御壽命は、先程申しました通り功德から成つて居る、功德を積んで居られるから壽命があります、これは一面に於て本佛として直接無限に御活動になるといふ方面は勿論であります。それ以外にやはり功德の結果として釋尊の壽命がある、併し功德が無くなつたら壽命が無くなるかといふと、無くなるどころではなくして、壽命は常住不滅であつて、而もその常住不滅の壽命を支へて、尙且の先程申したやうに非常に餘つて居る、その餘りを妙法五字として吾々に與へられるといふことは、今申した釋尊の成佛が無限に古い、結局成佛といふことは吾々には考へ得られないといふことに歸してしまつても、この意味合がやはり残つて居ることになるのであります。さういふ風に釋尊といふお方を、一面には絶対の本佛として考へると同時に、一面にはやはり御一人のお方であつて、非常に功德を積んだ結果佛様であらせられて、その功德を吾々に分けて下さるといふ、非常に温かい人格



的な方面を拜讀しないと、壽量品の有難味が本當に解らないと思ひます。

勿論その他に先程申しました、無限を直接に無限として考へる方面、即ち釋尊は本佛として無始無終の活動をして居られるお方であり、従つて五百塵點以前の菩薩行といふことを假に考へるとしても、それはやはり釋尊が本佛としてなされた活動である、本佛として既に悟られてゐるお方が菩薩の身になつてなされた活動であるといふ——「果上の淨用」と申しますが——さういふ方面をも忘れてはならないのであります。

そこで斯ういふ風に考へまして、先づ釋尊の御壽命といふものを考へて、その上に淨土の實在といふことを考へるのであります。これは勿論本佛といふ方面からも考へられますけれども、斯ういふ風に釋尊の壽命が盡きない、その壽命の盡きない方であるが故に、而も無限に古いお方であるが故に、釋尊の立てられたこの靈山淨土——これは釋尊が娑婆世界の衆生を教化する爲にお設けになつた淨土なのであります。——これがやはりその功德、或は壽命と

いふものの上に立つて居るのであります。従つてこの壽命の常住といふ事があつて初めて本當の實在を持つといふことを考へて置く必要があると思ひます。これは本佛の無始盡十方の御働さといふ方面とは違つた方面でありますけれども、無限といふものを二つの方面から考へて、斯ういふ方面からも考へませんと、壽量品の文字をその儘讀むことも出来な

いし、又壽量品の有難い意味合をその儘説くといふことが出来ないと思ふのであります。

これに依つてつまり淨土の實在といふことを申し上げたのであります。その後に行きますと、

我佛を得てよりこのかた經たる所の諸の劫數  
無量百千萬  
常に法を説いて  
佛道に入らしむ

(如來壽量品)

最初の一行の「億載阿僧祇なり」といふ所までは、今申したことと同じ意味であります。『常に法を説いて』から「無量劫なり」といふ所は、直接に本佛の御働きの始め無く終り無きことをお現はしになつて

居られます。さういふお方であるけれども、釋尊は吾々に相をお示しにならないといふのはどういふ譯

であるか、これは經文に書いてあります通り、吾々が慢心を起すといけないからその相をお示しにならない。併ながら實際に於ては、この娑婆世界でさういふ無限の古い昔から説法教化して居るし、又他の所に於ても衆生を救つて居る、別な言葉で言へば

常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在り。

(如來壽量品)

斯ういふ言葉があるが、釋尊がそこにおいてになるから淨土といふものがある。例へば阿彌陀佛がおいでになるから西方の淨土といふものがある、ところが日蓮聖人の御説明に依りますと、阿彌陀佛は釋尊がそこにお現しになつた佛でありますから、若し釋尊が念佛宗の言ふ通り御入滅になるといふことであれば、その根本の佛が御入滅になれば、その本佛から現れた佛も消えてしまひ、淨土も消えてしまはなければならぬ。それに反して釋尊竝にこの娑婆世界の淨土こそ、本當の實在であるといふことを懇々とお説きになつて居りますが、やはり壽命といふもの

の上に立つて、佛の命が減びないからこの淨土も減びないといふことを説かれて居ります。

少し説明が諱くなりましたけれども、兎に角さういふ意味合に於て、吾々は壽量品の經文を文字通り信ずることに依つて、釋尊の實在を根本的に諒解することが出来る、それと同時に釋尊のまします淨土の實在も、吾々は根本的に諒解することが出来るといふ點を申上げた次第であります。要するに佛に對する吾々の渴仰心を以て壽量品を拜讀することが、やはり淨土を吾々が信ずることの結局の根本になるのであります。それでありますから

柔和質直なる者は、則ち皆我が身此に在りて法を説くと見る。

(如來壽量品)

或は又  
一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず。時に我及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ。

(如來壽量品)

とあるやうに、佛様が靈鷲山に居らつしやるといふことを知るのは、即ち吾々が佛様を渴仰するからそこに居られる、渴仰が深ければ深い程、吾々の實在



の信仰は堅實になつて参ります。

そこで浄土の相の問題に入つて参りますが、浄土の相は、釋尊が法華經をお説きになつたあの時の非常に麗しい光景、即ち靈山浄土がそこに開かれた状態でありませんが、それが只今申上げました通り、釋尊が滅びないといふところから、やはりこの浄土も今日に至るまで滅びずにその儘存在して居るといふことになりす。ですから壽量品の浄土は何であるかといふことを考へようと思はすならば、どうしても壽量品をお説きになつたその場の光景を、私共は味つて見なければならぬと思ひます。

法華經寶塔品に、浄土の相を書いてありますが、これを拜讀しますと、

無量の衆を移して、國をして清淨ならしむ。諸佛各々寶樹の下に詣りたまふ。清涼池の蓮華莊嚴せるが如し。其の寶樹の下の諸の師子の坐に、佛其の上に坐したまひて、光明嚴飾せること、夜の闇の中に大なる炬火を然せるが如し。身より妙香を出して十方の國に徧したまふ。衆生薫を蒙つて喜び自ら勝えず。譬へば大風の小

樹の枝を吹くが如し。

(寶塔品)

多くの土地から佛様が集つて來られて、その時の光景をそこに語つて居られますが、地獄から天上界に至るまでの無量の衆は澤山の佛様が集つて來られる晴の場合でありますから、法華經に縁の無い人達は他方の土に押しやられてしまつて、その國は大變に綺麗な國になつて居る。そこで方々からいになつた釋尊の分身即ち釋尊のお現しになつた佛であります。その佛が皆寶樹といつて、非常に立派な木の下においてになつた、その光景はチョウド綺麗な池の所に蓮華の花が澤山咲いて居るやうに、あちらにもこちらにも麗しい佛の相が見られるのであります。さうしてその立派な木の下に師子の座があつて其處に佛がお座りになつて、各々の佛から非常に麗しい光が出て参ります、その光の出る相、それを見て居りますと、チョウド夜の眞暗闇の中に一列にズット松明が竝んで居るやうである。この光景が實に麗しい光景であると思ひます、佛様がズット一列に竝んで居ると、暗闇に松明が竝んで居るやうに、それが非常に鮮明に見える、佛様のお相が浮き上つて

吾々に映じて参ります。さうすると佛様のお身より麗しい香りを出して、その香りが十方の國、即ち四方八方に充ち満ちて行くのであります。多くの衆生はその香りを受けて非常に喜びに勝えない、これは勿論單なる香りではなくて、佛様の涅槃の悟りの香りがそこに現れたのです、まア幾らか形容的にも考へて宜いでありませうが、非常に良い香りがある。それで「譬へば大風の小樹の枝を吹くが如し」大風といふのは昨夜のやうな旋風、強風ではなくて、空一面を一方から他方に一樣に吹くやうな廣い大きな風であります、さういふ風が空一面ズツと吹き、小さい木の枝にまでもその薫を與へて居る、チョウド衆生が佛様の大きな香りを受ける、即ち感化を受ける有様が何となくこゝに語られて居るやうにも思ひます。私の説明は非常に下手であります、この經文を讀んで居りますと、浄土の非常に麗しい光景が眼のあたり浮んで來るやうに思ひます。私共の美に對する感じは、やはり佛にも通ずるやうなところがあつたと見えます。吾々は出來るだけ美しい姿を考へて、浄土はモットそれより美しいものであるといふ

風にして、浄土の相を考へて行くのが宜いのであらうと思ひます。苦しい時には地獄はモット苦しいぞと思ひ、喜ばしい時には浄土はモット喜ばしいと思つて、例へば今日のやうな時でも、多くの人達は家が潰されたり、水に流されたりして苦んで居るけれども、自分は塀が倒れたくらゐで済んだといふことは非常に喜ばしいのであります。さうして頼みつけの仕事師に手傳つて貰つてどうやら泥棒が入らないやうにすることが出來たといふことがあると思はすと、それは大難の中の小難といふことを考へますと衆生の世の中は非常に荒れて居るけれども、佛の浄土は非常に安らかであるといふ光景の一部分を吾々は味はせて戴けます。ですから結局嬉しいにつけても、或は苦しいにつけても、浄土といふことが吾々の信仰を増進する所以だと思ふのであります。

大火に焼かるゝと見るとときも

我が此の土は安穩にして

天人常に充滿せり

園林諸の堂閣

種々の寶をもて莊嚴し



寶樹華花多くして

衆生の遊樂する所なり

諸天天鼓を撃つて  
曼陀羅華を雨らして

常に衆の伎樂を作し  
佛及大衆に散ず

(如來壽量品)

これは何時も拜讀致して居りますが、例へば私の見ました麗しい所と申しますと、箱根の宮の下の富士屋ホテルへチヨット行つたことがあります、あそこは函山の晴嵐とでもいふか非常に美しい山景色と京濱地方では見られない明るい建築の美とを兼ねて居ります。室内には花も澤山あれば天井や欄間の裝飾も非常に立派に出来て居る、庭には温室と美しいブールがあり、立派な樹木も植ゑてあるし、殊に櫻なども澤山あります。そしてやはりこの經文の様子美しく飾つた人達が食堂や休憩所に集つてゐると、奏樂も演ぜられます。さういふやうな非常に立派な所を考へまして、その人工の美と自然の美と兩方具はつた美の極點に、やはり淨土を考へることが出来ると思ひます。

如來は已に三界の火宅を離れて 寂然として閑

居し林野に安處せり

(譬喻品)

私は大震災の時にさう思つたのでありますが、非常に火事が激しかつたので、裏山へ逃げて林の中へ掘建小屋を建て、其處に私共は避難して居りました。それで其處から激しい火事の様子を眺めて居つて、これは實に凄しい光景だなと思つてヒヨット後を見る。天地自然は何とも言へない程美しい、山林は青と繁つて居るといふやうな光景を見た時に、如來は三界の火宅を離れて寂然として林野に安處せりとこの田舎の山林に依つて淨土の麗しい光景を想像することが出来た譯であります。

若し善男子善女人、我壽命の長遠なることを説くを聞いて、深心に信解せば、則ち爲れ佛常に耆闍崛山に在して、大菩薩 諸の聲聞衆の圍繞せると共に、説法するを見、又此の娑婆世界其地瑠璃にして、坦然不正に、閻浮檀金を以て八つの道を界ひ、寶樹行列し、諸臺樓觀皆悉く寶を以て成じて、其菩薩衆咸く其中に處するを見ん。若し能く是の如く觀すること有らん者は、當に知るべし、是を深信解の相と名く

(分別功德品)

この經文は御承知のやうに分別功德品の經文であります。私共の信仰が非常に徹底して参りますと、信念の上にこの相が現れて参ります。或は解の字の方から言つて、智慧が非常に進んで参りますと、理論的に斯ういふ淨土の實在が考へられて来る、淨土が現れます。兎に角天台大師はこの靈山の相がまだ散じて居ないといふことを眼前に御覽になつたといふ事が傳へられ居りますが、吾々の信仰が深くなれば深くなる程、求める所が切であればある程、斯ういふ相があり／＼現れるといふことをお説きになつて居ります、そこはやはり日蓮聖人の「暮れゆく空の雲の色」といふ御遺文と同じやうに、非常に有難いところと思ひます。

私が申す迄もありませんが、この淨土は道が八つありますから、想像するに、例へば大連であるとか巴里のエトアルであるとか、あゝいふ風に道の交又して居る所でありまして、道路は透明なガラスを以て舗装されてゐる、そこに美しき寶物で飾られた建物が澤山あり、兩側に樹木の澤山植つた非常に麗

しい八つの道は、金の繩を以て境してある、それは人道と車道の境目ですか、或は道と道との境目であるか、それは判りませんが、兎も角道路上によくあるあの鎖、あれが全部金の繩で出来てゐます。斯ういふ風な都會的な街路の美しさから考へた淨土の美しさといふものを茲にお示しになつて居られるやうに思ひます。ですから吾々は有ゆる美しいことを、考へて、淨土はそれよりもまだ／＼美しいといふことを、絶えず考へて居れば宜いと思ひます。

これからは日蓮聖人の御遺文に就て申し上げようと思ひます。  
夫れ始め寂滅道場、華藏世界より、沙羅林に終るまで、五十餘年の間、華嚴密嚴三變四見等の三十四土は、皆成劫の上の無常の上に變化する所の、方便寶報、寂光、安養淨瑠璃密嚴等なり。能變の教主涅槃に入り給へば、所變の諸佛隨つて滅盡す。土も又以て是の如し。今本時の娑婆世界は、三災を離れ、四劫を出でたる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず、未來にも生ぜず。

(觀心本尊鈔)



これは先程申しましたやうに、諸經では淨土がいろいろ説かれて居るけれども、それは佛様が假にお現れになつて、佛が暫くおいでになる所として説かれた淨土であるから、結局それは常住ではない、これに反してこの娑婆世界こそ、三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土である。「三災」に就てはいろいろな解釋がありますが、今私の覺えて居る一つの解釋は水と火と風の災害でありますから、チヨウド今の場合に當嵌るのであります、さういふ災難を離れて居る。それから「四劫」といふのは吾々のやうに迷つて居る者の住む世界は、初めに出来上つて、暫くはその儘で居て變て壊れる、壊れたらその儘暫く空つぽで居る、この四つの階段を吾々の世界は經て行くのであるが、さういふ階段を持つて居ない、即ち本當の常住です。よく吾々が心配する、地球と慧星と衝突して壊れたらどうなるといふやうな、無常の心配がない、常住の淨土が娑婆世界である、斯ういふ風にお説きになつて居られるのであります。

命のかよはん程は、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱て唱へ死に死するならば、釋迦多寶

十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來つて、手を取り肩に引懸けて、靈山へ走り給はる、二聖二十羅刹女は、受持の者を擁護し、諸天善神は天蓋を指し旗を上げて、我等を守護して、隨かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり、あら嬉しや、あら嬉しや。

(如説修行鈔)

これは如説修行鈔の中のお言葉ですが、本多上人は「須臾の程に」といふ所が非常に力強いと申されました。若し法華經を修行して唱へ死に死ぬといふやうな事があれば、死ぬと同時に淨土に至ることが出来る。チヨウド穢土の幕が切つて落されて、その向ふに直ぐ淨土が現れるといふ風な考を持つて、どうせ死ぬやうな時には非常に苦しい、或は慘憺たる光景を眼のあたりに見て居る場合もあります、その一歩先に直ちに淨土の實在を考へることが出来るのであります。

退轉なく修行して、最後臨終の時待つて御覽ぜよ、妙覺の山に走り登つて、四方を屹と見るならば、あら面白や、法界寂光土にして瑠璃

を以て地とし、金の繩を以て八つの道を界へり天より四種の花降り虚空に音樂聞えて、諸佛菩薩は常樂我淨の風にそよめき、娛樂快樂し給ふぞや。我等も其數に列りて遊戯し樂しむべき事はや近げり。信心弱くしては斯る目出度き所に行くべからず。行くべからず。(松野殿御返事)

この「松野殿御返事」の御遺文は、分別功德品の御文から取つてあります。兎に角退轉なく修行して臨終の時待つて、四方を屹と見るならば、法界は淨土である、さうして先程申上げたやうな光景が其處に成立つて居るといふ事が説かれて居ります。

それから「十如是鈔」にも次のやうなことを言はれて居ります。

臨終の時に至つて、諸のみえつる夢も醒めてうつゝになりぬるが如く、只今みゆる所の生死妄想の邪思ひがめの理はあと形もなくなりて、本覺のうつゝの覺にかへりて法界をみれば皆寂光の極樂にて、日來賤しと思ひし我此身が、三身即一の本覺の如來にてあるべきなり。

(十如是鈔)

さういふ譯で、この法華經にお説きになつた淨土は最も麗しい淨土であつて、私共が現在ではこれを見ることが出来ない、現在では見ることが出来ないといふのは、佛様の慈悲の爲に一時見えなくなつて居るが、佛様は淨土を造るのにも、非常に大きな神通力に依つて造られるのでありますけれども、その淨土を又一面、吾々のやうに毒の深い者には見せないやうしておいでになる。併ながら若し退轉なく題目を唱へれば毒が消えますから、その毒の消えた臨終の刹那に於て、この穢土の幕が切つて落されて、其處に淨土といふものが浮んで参ります。さういふ事を吾々は樂しみにして法華經の修行を致します。この淨土こそ本當に實在の淨土で、佛様も實在であるが吾々も亦其處へ行つて、實在の淨土に住むことが出来るのであります。

大體この土といふ問題に就きましては、吾々の心が土を造つて居るのであります、それは本月の「統一誌」にも書いてありますが、私共の心に相應した土が外に造られます、この事を詳しく説いたのは世親菩薩の成唯識論といふ本であります、經典で



は解深密經などに詳しく説いてありますが、その世界は吾々の心の上に立つて居るといふ事が非常に大事であり、吾々の心から吾々の心が變れば世界は絶えず變つて行きます。吾々のやうに天界以下の六道の者は、一人で自分の土を造るだけの力がなくて、大勢寄つて土を造つて共通の土に住んで居りますから、それを同居土と言つて居ります、ですから吾々は、世界といふものは客觀的なものであつて、吾々はその中に生れ唯だ浮んで居る、さういふ錯覺を起すのでありますけれども、實はさうでなくて、心の方が本で、さうしてこの世界を作つて居るといふのが佛敎の教義であります。隨て二乗と言はるゝ聲聞緣覺の方便土とか、菩薩の境界たる、實報土とか、或は佛様が吾々を救ふ活動をされる時の靈山淨土とか銘々の果報によつて土は異なります。その靈山淨土は必ず佛様の壽命の上に立ち、佛様といふ境界に應じその慈悲の活動よりして、その土が造られ、さうして吾々は今修行して臨終の時にその淨土へ寄せて戴く、また自分の力を以ては淨土を造るといふ所まで行かないのでありますが、兎に角釋尊が吾々の爲

### 日蓮聖人の主張

梶木 顯正

#### 1. 統一主義を主張す

これは法華經の大精神である、だから世間的の事であらふと出世間的の事であらふと別に區別は立てない、小にしては家庭から大にしては國家社會に至るまで、凡て人事文化の全般に亘つて叫ぶ處である。「統一」とは法華經の示す「一ヨリ多ヲ出シ、多ヨリ一ニ歸ス」と云ふ原理を根據として叫ばれた大理想である。先づ此の意味から云つても、現在日蓮門下が(例へば精神は一つ)形の上に四分五裂の姿を示して居るのは一大矛盾である。

#### 2. 一王一佛主義を主張す

これは日蓮聖人の尤も鮮明なる旗標である。此の一王一佛の「一」は勿論單なる一では無い。「多」を出し「多」を納める處の「統一」である。(意を要す)他の佛敎徒の如く「釋迦・彌陀二佛」

にお現れになつて下さつて、その淨土に一時住まはせて戴いて、さうして結局吾々も佛様の大きな果報を得る譯になるのであります。

いろ／＼申上げましたけれども、要するに經文に依つて淨土を信解して行きたいと思ひます。さうしてそれを樂しみに致します。私共はどんな事があつても退轉なく修行して行かなければならぬ。この間磯部先生が言はれたやうに、あのやり方で修行して行くことが、その結果としては淨土に生れることで、それが吾々日蓮主義を信ずる根本の目的になるのであります。

甚だ統一のない話を申上げましたけれども、御參考になれば幸ひと思ひます。(了)

などと云つて二佛を平等に見る如き事は法華經はしない、若し平等に見るならば全佛を平等に見るが、然し最後絶對的の立場から必ず統一佛を立てるのである。之れは法華經の立て前である。大體釋迦・彌陀二佛などといふのが胡魔化して、佛敎として釋迦如來を除けば佛敎ではなくなるから、釋迦如來と云ふのはよいが、何故に阿彌陀を特別に出したのであるか、佛敎には過去の千佛、未來の百佛、現在の諸佛並に十方の諸佛、と云ふ譯けて無數百千の佛を説いて居る、其の無數の三世諸佛の中から一體何の理由、何の因縁で阿彌陀を引張り出したのであらうか判斷に苦しむ。法然上人の考へ方は正道を過つて居るのである。

其處で日蓮聖人は佛敎の正統を踏んで釋迦如來(特に壽量品)を信仰の中心基點とする。近頃の日蓮信者はボケてお稻荷さんや、帝釋、鬼子母神等の前で、如來壽量品第十六自我得佛來……當説法教化無數億衆生……とヤツテ居る。(殊に稲荷や帝釋や鬼子



のか筆者は(疑問に)これは宗徒のネボケた證據である。こんなのは問題にはならない。其處でこの正統觀から出發して一王主義を主張し勤王の大義を説く。故に日蓮法華宗は幕府からは何時も邪魔にされた。源氏平家ト申ス王ノ門番ノ犬二匹」と云ふのが日蓮聖人であり「幕府ノ將軍トハ民ナリ、何ゾ皇室ヲナイガシロニスルヤ」と云ふのが法華經の叫びである。故に「天に二日なく地に二王無し」とは日蓮聖人の主張である。

3. 日本國は世界に勝れたる國なる事を主張す

我が日蓮聖人は「日本國は八萬の國に勝れたる國なり」と云ふ國家觀を持つて居る。即ち日本國の王道主義は佛教の一乘主義を持つて起つ轉輪聖王の理想を實現したものである、といふ國體觀から出發して居るのである。故に眞の天皇神聖論は法華經に基かなければ解るものではない、今の日本の歴史丈では永久に解らぬ(今泉定介氏等は随分努力

4. 生活は手段なる事を主張す

日蓮聖人は「智者學匠の身と成つて地獄に墮ちて何の詮かあらん」云云即ち學者に爲つても地獄に墮ちたら駄目じやないか、百萬の金持に成つた處が地獄に墮ちたら何んの爲の人生か解らぬではないか、と云ふ。即ち人生の生活と云ふものは花を咲かせる爲の準備であり手段であつて目的では無いと云ふ事を教へられるのである。お互ひは手段と目的とを混同せぬやふ注意せねばならぬ。六ヶしい問題も多々あるが今は略して措く。

記事

本部 團報

梶木師追憶會 順應院日義大徳その化を遷されてから早や四周年を迎へる。十月三十日は御逮夜に相當するので、本部に有志打集ひ心ばかりの法味を捧げた。磯部理事司會者となつて北條平太郎氏、本郷常次郎氏、和賀謙介氏、石川隆一氏、池田悦太郎氏、中村清一氏、沼部彌太郎氏、河合睦明氏等夫れ、梶木師の高潔な人格者であつたこと、布教に熱心であつたこと、辛棒強いこと、清謙忍難の徳や、有恩の處を思ひ出づるまゝ卒直に語り合つた。而して遺弟村田顯明師も温情慈母の如き師範の在世を偲んで盡きざるものがあつた。御婦人の側からもお話を承る筈であつたが、時間の餘裕なかつた爲め次にお譲りした。左に本郷氏の談話を録する。

君逝きて三年を過ぎて今日この日

在りし面影偲ひてそ見る

武漢おちて世はさゝめきの只中に

同志打ち寄り御魂まつりぬ

幹部會 先頃はしなくも尋常六年生の國定教科書から「釋迦」の項目が「修行者と羅刹」と入れ替へられた事に就て世間を騒がせた。各方面の意見を徴すると、多くは釋迦の名目を削除することは、この精神作興とか、東洋平和を叫ばれてゐる場合特に宜しからぬことだといふが、一方には教師に依つて自ら生徒の宗教情操に大影響を及ぼすもので、教材の運用は先生にある、その構成に就ても在來のもので充分とは思へない、と、諸説轟々たる中に、立正、駒澤、大正等の三大學及智山専門學校が中心になつて當局に接渉して居る。この問題に對して十月末、本部に役員會を催してその情勢や本團の態度を協議した。

眼を一轉すれば皇威四百餘州を震駭し悦豫せしめて居る。然るにその建設に對する精神文化の工作は如何にするか、馬上天下は治め難いであらう。果して人の魂の問題は如何に收攬するか。三Sに稱されて居るのは獨り北米丈ではあるまい、高く日本精神を誇れる者にして、大哲學大宗教の妙理體験をどれ程有てるか、噫。昔しは支那朝鮮を経て我國に傳はつた釋迦牟尼佛の明教は、今や再び東より西へ還るべき瑞相は十二分に徴して居る、任重くして途彌々遠しの感がする。

立正安國論講座 毎週火曜日晚六時半より勤行、七時より小林一郎先生の御書講義は、有名な立正安國論である。かゝる



時局に際しては一段と深く聽者の身に沁み込む、矢張り學ぶに如かさるなりを思ふ。

日曜日清集 毎日曜早朝六時半より修法會が営まれ、又午後二時より五時前後迄初めに修法、終つて法話が轉ぜられてゐる。有志の隨喜参加を望む。

### 福島支部報

十月二十二日夕 此の月の例會は講演會を以て代らしめるのが毎年の慣であり、今年も又古今未曾有の非常時下にあつて銃後國民の思想善導の使命を痛感せる我が統一團福島支部は高商鐵會の後援を得て、本年度日蓮主義大講演會を演舞場に開催した。

本夕は特に磯部先生の他に池田新一先生がお忙しい所御來福あり、我等が講演會に一段の光彩を與へられし事は誠に感謝に堪へない。

當日のプログラムを示せば左の通りである。

- 一、開會の辭 岩井福島支部長
- 一、戰歿將兵慰靈並皇軍武運長久祈願
- 一、日蓮聖人の御法難 高商學生 橋本美芳君
- 一、聖人の信仰と其理想 高商學生 本多正文君

- 一、神州の大使命 池田新一先生
- 一、眞實幸福者 磯部滿事先生
- 一、閉會の辭 夏谷江南先生
- 一、萬歳三唱

黄昏時より霽條として降り來つた秋雨は、開會時に到るも容易に止まず、一時は聽衆の寡少さが氣遣はれたが、岩井支部長の挨拶半ばにして相當の聽衆堂を埋め、而もその各人の顔には「さあ聴かまほし」と言ふ様な熱心な色が漲つてゐた。その中の數名は、講話のノートに懐しいペンを動かしてゐた程であつた。雨は意外にも信仰あるもののみを集めたと言ふ逆の好結果をもたらした。何事も善い事は敢然としてやるべきものだといふ活きた教を與へられた心地がした。

開會の辭終了と共に一同、戰歿將兵の英靈を慰め、且つは出征軍人の武運長久祈願の爲め謹んで唱題、次で直ちに學生の講演に移つた。橋本君は前記の演題の下に聖人の生立ちより話を進め、正法弘通の爲、龍の口其他であらゆる迫害に身をさらし、新らしき事を稱ふるものゝ甘受せねばならぬすべての苦痛に堪へ、飽くまでその『法華經第一、念佛は無間地獄の業ぞ』との叫びを貫き通した聖人の強い信念を強調した次で同じく高商學生本多君立ちて聖人の信仰の中核を爲すもの、及その信仰の具象の姿を明かにする事によつて、聖人の信仰の如何なるものかを知らしめ、次にその理想とは世界を

舉げてこの妙法の下に於ける一大佛國たらしめるにあると結んだ。

學生の講演終了するや池田先生拍手に迎へられて徐ろに登壇。私は本日代用品として参上したのですと最初から聽衆を爆笑せしめて話を進められた。先生の御法話の内容左の如し  
明治の維新、三百年來の鎖國が解除されるや、西歐諸國の文明は怒濤の如く我が國に侵入し來り、國民はその自由主義個人主義の華やかな存在に魅了し去られ、思ひ切つた改革が各所に實行され、思想界は漸く混沌たる状態に立ち到つた。彼等は彼等の胸中深く秘めしもの、當時の思想界に於ける葛藤を断ち切るに充分であつた所の最も貴きもの——宗教信仰に對して何等の關心も持たなかつた。

即ち彼等は彼等の生活全體を恐るべきユダヤ思想の蹂躪に委せつゝ今日に至つたのである。而して今時の非常時局は國民にその從來の忌はしい陋衣をぬげと要求してゐる、今にしてこの態度を改めないなら果して又何時の日がある。國民は宜しくこの法華經の明教を身に體してユダヤ思想なる見えざる敵と戦ふべきである。最後に法華經の根本精神が恐れ多くも三種の神器の御精神と一致融合して居る事を述べられ、國民は法華經の本佛釋尊實在の精神を正確に把握する事により、三種の神器の含まるゝ貴き意味合を會得せねばならぬと力説せられた。

最後に磯部先生登壇お經文の一節御朗誦の後、左の如き趣旨の御法話をなされた。

近時甚だ遺憾千萬な事には我が佛教が漸次排撃されつゝあるが、佛教は已に我國のあらゆる物に入り込んで居る。我が國から佛教を取去る事は我國からそのもてるものすべてを取去る事と等しい。彼等は佛教を消極なる厭世未來主義に墮して居るとか、平等をのみ貴ぶとか、獨善的であるとかの點に於て不可となすのであるが、それ等は佛教の眞精神に徹せざる近視眼的見解にすぎない。佛教中の一局部に偏執しては到極その全貌は知れない。限りある物質のみで多くの人は満足されない、どうして精神上に法悦の妙味を持つことでありたい、人々に心からなる本當の福樂を與へるものとしては、佛教を除いてはない。佛教は宗教の側からは勿論、哲理の上からも、道德の方からも實に完全な教である、而して法華經がこの最頂點に達し、有ゆる世間の諸教を開顯し統一してゐる。故にこの信仰法悦に浴せる人は、第三者から見るときは如何に苦しうでも、當人自身としては大なる歡びであり愉快なものである、さればその日常の生活は光り輝いてゐる、これこそ眞實の幸福者である。

やがて夏谷先生の閉會の辭に次いで、磯部先生御發聲にて謹んで 天皇陛下の萬歳を三唱し、新しくしてこの記憶すべき大講演會を終つた。



佛の慈悲の涙を思はせる様な秋雨は未だ止まない。ひつそりと寂靜つた暗い夜道を行く我等の胸の中には、佛弟子としての小さい勤めを果した喜びと、又、一つ善い事をしたなといふ喜びとが心地よく疼いてゐた。

十一月十日午後 高商にて月次例会を催す。磯部先生を中心とするもの二十有餘名、先生には『日蓮聖人の教義』なる演題の下に熟辯を揮はれ、その終始を一貫せる根本原理『理論の上に立つ信仰』の眞理性は、吾人をして心から首肯せしめるに充分であつた。教義の最要を宗旨といひ、宗旨は三大秘法である、この三大秘法の内容及本迹の意義と區別とを明かにせられ、そして聖人の宗旨たる本門の本尊、戒壇、題目は皆妙法蓮華經の五文字の中に包含せられて居り、吾々がそのお題目を唱ふる態度は、哲理的に非ずして、信仰的でないならばならぬとお諭しあつた。

後お茶を戴き乍ら愉快な座談會に移り、二三の質疑應答あり、午後五時半會を閉じた。

同日夕 午後七時頃より中村様方にて支部例会を催す。出席者約二十名、内高商より五名参加、極めてなごやかな會であつた。

磯部先生には、時あたかも、國民精神作興の御詔勅を下し賜はつた記念日に相當するを以て、『精神作興と日蓮聖人』なる演題にて御話しを進められた。その内容を示せば左の通り

磯部先生は『教』といふ題下に、時局柄一層教の大切な所以を高調力説され、従つてその教は最善最高なるは勿論、而かも我國體に合致せるものでなければならぬと、佛敎の卓越より更に進んで法華經の超勝を立論し、その法華經の内容に入つて四法成就を略説された。それは一には本師釋尊毎自の慈願に當護せられて居ることを確信し、二には道德的にして人の道、諸の善根を植えて行くこと、三には眞理を認め信仰を決定して正義の團結を以て相扶け力強く活くること、四には上に本佛釋尊の大慈大悲に感受し、下に對しては慈念を以て人々の爲めに福祉功益を増進せしめんと努力すること、此等の事柄が眞に理解され實踐さるゝ時に、其の人等は法華經を讀める者である。今や世を擧げてかゝる人々を要求して居るのであるまいか、幸に諸君等に於て共鳴さるゝ方は、直ちにこれを實行に移して戴きたい、その全分なれば一番結構であるが、例へその中の半分でも四分一でも、微分でも宜しい、少し宛から進んで頂きたいものだと思ふに述べられ、我等は感銘深く拜聴し心密かにその實行を期した。

食後一時から、近所の豊岡小學校々庭に於て合同の大運動會が催され、其處には模擬店まであつて極めて盛大に愉快

である。近時の戦争は總力戦と言はれる。その總力とは、國民、國民の仕事、財貨及び物質の四つの力が含まれたもので吾々はその四つのものを通じて大いに國家に貢献する所あらねばならぬ。而るに何ぞ、上述の四つのものを中心とする現時の社會事相の陰には、見えざる惡魔の手の暗躍がある事を看過し難い。それは言ふ迄もなくユダヤ思想である。此處に於てか、吾人は法華經に對する信仰を益々堅くし人格を向上せしめねばならぬ、精神生活の妙味を意識することである。それには眠れる佛性を呼び覺ますに就て壽量品の本佛釋尊の實在を確信し、この鐵壁の如き大信心の前に一切のものは開顯統一さるゝでせう。正しい信仰には正しい道德行爲が顯はれる、君父に對する忠孝の眞の姿も、この法華經を戴くものにして始めて見ることが出来ると思ふ、之が眞の精神作興であるまいかと結ばれた。

### 酒悅立正青年團

店是五項中の冒頭に『信仰ヲ念トスヘシ』とあり、商賣は人格に基くといふ見地から、毎月三回に亘つて統一團講師の御指導に預り、模範店員として益々精練されつゝある我が上野池の端酒悅福神漬商店では、十一月第一日曜六日の定休日

に埼玉縣豊岡町の繁田團に、池田團長引率、各員團服姿も凛々として各々の身心俱に鍛鍊され、殊に有意義なる一日を過し得たことを歡ぶ。終りに繁田商店の各位に滿腔の謝意を捧げる。

### 福島高商同窓會

十月六日(日)例会 勤持品讀誦唱題修行の後、磯部先生の立正安國論御講義があつた。先生の御講義を拜聴する毎に、私共は從來餘りにも外界の分析を事とする學問に慣れて彈力ある精神を消磨し、感激の泉を涸らして了つたと思ふ。私共の行動は餘りにも分別くさく、従つて安つばい。原始民族のもつ大膽と幼兒のもつ率直とは福島高商生の誇りではなかつたか。錆びた鐵は熔鑪に入れとてかさねばならぬ。熱した鐵はやはらかい中に鍛へねばならぬ。私共は莊嚴された御本尊の前に拜跪しお題目を聲の限り唱へる。十返、二十返、百返、千返。類は熱し心は柔いで赤子となる。先生の嚴かな御妙判朗讀が魂を洗ふ。其上で立正安國の設法を聽聞するのである。



團費誌料維持費及寄附金領收 (自十月二十一日 至十一月二十日)

一金貳圓貳拾錢也	東京	松岡銀次郎殿
一金五圓也	同	堀田辨戒殿
一金貳圓五拾錢也	久留米	平岡越郎殿
一金貳圓六拾錢也	東京	藤原清光殿
一金貳圓五拾錢也	愛知縣	藤田清太郎殿
一金貳圓五拾錢也	東京	大野義夫殿
一金參圓也	同	宇野博順殿
一金五圓也	名古屋	笹本豊吉殿
一金五圓也	東京	北條平太郎殿
一金五圓也	同	高橋義雄殿
一金六拾圓也	横濱	中村清兵衛殿
一金五圓也	東京	秋田淺次郎殿
一金五圓也	同	松岡フユ子殿
一金五圓也	同	篠崎又兵衛殿
一金五圓也	同	菊地雄三殿

右難有入帳仕候也 (以是代領收證)

一金貳圓貳拾錢也	富山	石原重太郎殿
一金貳圓五拾錢也	横濱	日山與三郎殿
一金參圓也	山口縣	小野經子殿
一金貳圓五拾錢也	福島	國分文子殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	三須久三郎殿
一金貳圓貳拾錢也	同	安井源吉殿
一金壹圓也	同	安井米藏殿
一金六圓也	同	越山雄四郎殿
一金壹圓貳拾錢也	同	中村のぶ子殿
一金拾圓也	静岡縣	渡邊退藏殿
	東京	野口英司殿

財團法人 統一團會計

# 佛說優填王經

第六套の四

## 西晋沙門釋法炬奉 詔譯

聞きしこと是の如し、一時、佛、拘深國に在ましき。王を號けて優填と曰ふ。拘深國に逝心有り、摩回提と名づく、女を生む。端正にして華色、世間に雙少なし。父は女容の一國に希有なるを覩て名づけて無比と曰ふ。

願はくは佛、哀を加へ、廣く女惡魘魅の態、其の羅網に入り能く自ら抜くこと尠きを説きたまへ。吾れ其の禍を聞いて必ず以て自誠し、國民は巨細以つて操を改むることを得ん。佛の言は、此を用つて問の爲めに且らく餘義を説きたまふ。

王曰さく、餘事は異日之を説きたまふも晚からず、女亂は意を惑はず兇禍の大なるに其の禍を聞かず、何の縁にて之を遠ざけんや、願くば、佛、具さに吾が爲めに地獄の變、及び女人の穢を釋したまへ。



佛の言はく、具さに聽け、男子は姪の惡有りて却つて女妖を觀る。  
王曰さく、善し、願くは明教を受けん。

佛の言はく、具さに聽け、男子に四惡有り、急いで當に知るべし。世に姪夫有り、恒に女を觀んと想ひ、妖聲を聞かんと思ひ、遠く正法を捨てて、眞なるを疑ひ、邪なるを信じ、姪網の罽ぶ所、盲冥に没在し、欲の爲めに使はる奴の主を畏るゝが如く、女色を貪樂して九孔惡露の臭穢を覺らず、渾沌の欲中に賭の如く、瀾に處して其の臭を覺へず、快を以て安と爲し、計らず、後ち當に無澤の獄に在つて痛を受けて極まり無かるべし。心を注ぐ淫噉に在り、其の涕唾、其膿血を翫びて之を珍とし、玉の如く、之の甘きこと蜜の如し、故に欲態の士と曰ふ。此を一の惡態と爲す也。又親の子を養ふに、懷妊し生育し、稚の長大を得んに勤苦すること論じ難し。子、成人に到れば、家を懼れ、財を竭くし、膝行肘歩し、媒に因り情を表し、彼を致す。妻と爲んに若し異域に在らば尋ねて之を追ひ遠近を問はず、勤苦を避けず、意を注ぐ姪に在つて親老を捐忘す。既に得て妻とせば之を貴むこと寶の如く、私かに相娛樂を欲し、父母を惡見し、其の妖言を信じ、或は鬪訟を致して、身の從生する所を惟はず、親の無量の恩に孤く。斯を二の惡態と謂ふなり。又人の世に處す勤苦し、疲勞

し、躬自ら財を致す、本誠信にして道を敬ひ、意に沙門梵志を尊戴するの心有つて世の非常を覺り、布施して福を爲す。妻を取つての後は情、姪欲に惑ひ愚蔽自擁し、眞に背き邪に向ひ、専ら女色に由る。若し布施の意有つて發言を欲すと雖も、女色を相呼し、清淨行を絶ち、更に小人と成り、佛經の戒、禍福の歸を識らず、苟も姪色の爲めに身を羅網に投じ必ず惡道に墮ち、終に改めず。斯を三の惡態と謂ふなり。又人の子と爲りて養恩を惟はず、生を治め財を致し、以つて親を養はず、但だ東西以つて廣く姪路を求め、寶物を懷持して人の婦女を招き、或は六畜を殺し、鬼神を姪祀し、酒を飲み、歌舞し、合會の後、至りて方便を求め、更に相招呼し以つて紆情を遂げ、其の偶を護るに及びては喜んで以て喩ふ無く、姪結縛著復た識る所無し。爾の時に當つて唯此を樂と爲し、惡露の臭穢、地獄の苦痛を覺らず、一は則ち笑ふ可く、二は則ち畏る可し。譬へば狂犬の其の非を知らざるが若し。斯を四の惡態と謂ふ也、佛の言はく、男子に是の四惡有り、用つて三塗に墮つ、當に審さに此の態を遠ざけて苦を免るべきのみ。復た女人の惡を説くを聽かんや。佛、便ち偈を説いて言はく。

已に欲の爲めに使はれ 意を放ちて安んずる能はず



習つて非法に施す

將た何を以て賢と爲ん。

亦た魚の鉤を食し

飛蛾の燈火に入るが如し

愚者は見て歡喜し

後の受禍を惟はず。

佛、説きたまふこと是の如し。

優填王歡喜し即ち頭面を以つて地に著け、佛に白して言さく、實に生れてより以來女人の惡を聞かず、乃爾く男子の悖亂、之に隨ひ罪に墮つ、但だ不知の故に心意を制せず、今より已後身を終るまで自悔し、三尊に歸命し、敢て復た犯さじと。佛の爲めに禮を作し、歡喜して去りにき。

佛說優填王經 畢

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓九拾錢
日蓮主義精要		全	金拾五錢
眞理の基礎に關つ佛敎の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金參圓廿五錢
日生上人レコード(四曲)		全	金拾錢
日蓮聖人		全	金貳拾錢
本尊意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢
佛敎の心髓		全	金壹圓七拾錢
勳行作法		全	金拾錢
河合妙明著		全	金壹圓
皇道と日蓮主義		全	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ七十  
財團法人 統一出版部  
振替東京九四二〇番

定價一統  
一冊 金貳拾錢 送料壹錢  
半ヶ年 金壹圓貳拾錢  
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

▲御申込ハ總テ前金ノ事  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十三年十一月廿七日印刷納本  
昭和十三年十二月一日發行  
(第五百二十五號)

不許複製  
東京市小石川區音羽町六ノ十七  
編輯部 磯部 滿事  
發行人 磯部 滿事  
東京市四谷區內藤町一  
印刷人 山田 英二  
東京市小石川區音羽町八ノ十一  
印刷所 野島好文堂印刷所  
電話牛込六九六六番

發行所 財團法人 統一出版部  
東京市小石川區音羽町六ノ十七  
電話牛込五三三六番  
振替東京九四二〇番